魔法科高校の夜の天（そら）

山葵印

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夜天の書の主になっちゃった少年が魔法科高校に入学してさすおにするお話。

※更新は不定期です

※現在改稿作業中につき、最新話はもうしばらくお待ち下さい　現在一話まで改稿済み

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 16
第3話 …… 34
第4話 …… 51
第5話 …… 67
第6話 …… 82
第7話 …… 98

第1話

魔法。それがお伽噺やファンタジーの産物ではなくなってから、既に一世紀が経過しようとしていた。世界の国々は自国で魔法を扱う人々…魔法師を育成することに国力を注ぎ、それに伴うように魔法に関する技術は飛躍的な発展を見せる事となる。

「はぁー…」

さて、そんな世界の、とある場所。そこには一人の少年がいた。彼は深い溜め息をつき、歩いていく。彼の名は森崎駿(もりさきしゅん)。この春高校生になった少年少女の内の一人である。

彼がどうしてこんなところにいるか、それは彼の『友人』がこの近くに居るからだ。勿論、森崎の溜め息の原因は彼にある。

「おーい」

彼自身、その友人がいつ問題行動を起こすか戦々恐々としているが、まさかこんなところではぐれるとは思わないだろう。

「駿ー? 聞いてますかー?」

友人は只でさえ狙われる立場にあるというのに、少し無防備過ぎではないか。

「ちょっとー? 森崎駿くーん?」

ここまで自由だと、ボディーガードの家である森崎の名が廃ってしまうのも時間の問題ではなかろうか。

「……えいっ」

「ぐぼあっ!?」

急な頭部への衝撃に吹き出しつつ、森崎は急いで隣を見る。そこにいたのは一人の少年だった。

腰に手をあて、森崎を怒ったように見上げる彼は黒い髪の所々に白髪が、まるでメッシュをいれているかのように入っている。身長は森崎の胸辺りに届くかといったところだろう。森崎は半眼で少年を見やると、もう一度深い溜め息を吐いた。

「…雄大(ゆうだい)。」

「何でしょう?」

「何処に行ってた?」

森崎がそう言うと、雄大と呼ばれたその少年は手をポンと叩き「そうでしたそうでした」と言って一枚の紙を手渡した。

「……これは?」

「第一高校のマップです」

手描きですよ、と少年が胸を張ってふんす、と息を吐き出す。森崎は暫く震えていた

が、それをポケットにしまって、言った。
「…雄大」
「何でしょう?」
「マップはホログラフィーのものが事前に配布されてるが?」
「え」
　ピシリ、と雄大の動きが停止する。森崎はそのまま輝かしい程の笑顔で続けた。
「更に言えば、そのマップはお前にも配布されてる筈だが?」
「……嘘ですよね?」
「残念ながら本当だ。お前がいつも使ってるＣＡＤに送信されている。証拠もほら、ここに」
　そう言って森崎は、スマートフォンらしきものの画面を雄大に見せる。雄大の顔が段々と青ざめてくるが、森崎は構わず言葉を続けていく。
「お前の性格上、ＣＡＤに触れない日があるとは考えにくい。それを踏まえてもう一度質問しよう。『何処に行ってた?』」
「え…えっとーそのー…怒りません?」
「納得がいけばな」
「ごめんなさい何か騒ぎがあって遅れましたァ!」

頭を下げながら叫ぶように言った雄大の言葉に、森崎の表情が若干変わる。真剣な声で、彼は呟いた。
「……続けろ」
「え、許してくれるんですか？」
「さっさと言え」
「アッハイ。えーと、司波深雪（しばみゆき）さんっていたじゃないですか、新入生総代の」
「ああ」
あの人か、と森崎は全校生徒の前で凛とした態度を崩さなかった少女を思い出す。目の前の友人等、何人かの男を除いてほぼすべての男が彼女の妖精のような美しさに見惚れていただろう。
「その司波さん、お兄さんがいらっしゃるようなんですよ」
「…ほう」
森崎のその時の心情を一言で表すならば驚きだった。異性の双子。このご時世、そう言ったものは何ら珍しくないモノと化している。しかし、兄妹で同じ学校に入学する、というケースはかなり稀だと言っていいだろう。そう森崎が思ってるとも露知らず、雄大は顔を青ざめさせたまま続ける。
「でまあ、そのお兄さん。七草生徒会長と親しげに話されてたんですよ」

「ふむ」
『ああこれ関わっちゃ不味いやつだ』と駿に散々叩き込まれてましたから横を通ろうとしたんですよ、そしたら件の生徒会長にこの量の荷物を持っているのを見咎められてしまいまして」
「は？」
雄大の顔が段々と土気色になってくる。荷物、というのは雄大が何時も担いでるリュックサックの事だろう。森崎は無言で右手の親指をたてた…かと思うとそれを上下反転させる。
「ギルティ」
「待って下さい駿！答えを出すのはあまりにも早計ですし、これは所謂スゴイ＝シツレイにあたりますよ!?」
「何を言ってるのか分からないが生徒会長に咎められた時点でアウトだろうがっ…！」
その発想は無かった、とでも言いたげに森崎を見る雄大。森崎は額に青筋を浮かべたかと思うと、大きく溜め息を吐くのだった。

森崎駿の友人である彼…雄大の経歴はかなりとんでもない。僅か十二歳で現在の体制に一石を投じる新たなシステム『カートリッジシステム』を発明し、その後

Ｆ　Ｌ　Ｔ（フォア・リーブス・テクノロジー）と業務提携を結びカートリッジシステム搭載デバイスを作成。

カートリッジシステムとは、特殊な魔法を用いて作られたカートリッジに魔力を込め、それを銃の薬莢のように装填し、爆裂させる事で魔法そのものの出力を増大させると言うものだ。

安全面の課題という問題があるもののこのシステムの開発により、保有霊子量が劣る魔法師でも爆発力によって、格上の魔法師でも拮抗ないしは勝利することが可能となった。これにより『優れた魔法師＝保有想子量（サイオン）が多い』という現行の体制に止めをさす形になり、今や魔法師は生まれもった才能（モノ）をどれだけ生かすことができるかというステージに突入している。

その為、海外では彼の事を開発したカートリッジシステム、そのコードに準（なぞら）えてこう呼んでいる。

――『革命児（レボリューション・キッド）』と。

「駿！このクレープ凄い美味しいですよ！」

「ハァ…」

そんな彼が今隣でクレープを貪っていると知ったら、世の人間は全員ずっこけるのではないだろうか、と森崎は内心で愚痴を吐く。雄大のＣＡＤ開発、システムの発想は見事だし、それは森崎本人も知るところである。

だが、それ以外。例えば日常生活やらがほぼ壊滅的なのだ。今日あの第一高に入れたのだってほぼ奇跡のようなものであり、1―Eという一科生一歩手前のクラスで入学したと聞いたときは卒倒するかと思ったほどだ、と言って伝わるだろうか。

隣でぽわぽわとしたオーラを出しながら早くも四つ目を食べ終わり、五つ目を今まさに食べんとしている友人を見て、森崎はまた溜め息を吐いた。

「どうしました駿。クレープ食べます？」

「いらない。…で？楽しめそうなのか第一高校は。」

「んー…そうですね」と呟いて、雄大はクレープにかぶり付いた。そのまま咀嚼して飲み下し、彼は笑って、

「大丈夫ですよ駿。楽しめるかではなく楽しむんです。…あれからもう7年。未だに魔法は上手くはなりませんけど、僕もそろそろ克服時かな、と思いまして。」

「――それで第一高校に入る辺りがお前らしいよな…」

何かを言おうとして。直ぐに口を閉じて、森崎は呆れ混じりに呟く。「ちょっと！それってどういう事ですか!?」と抗議する友人を努めて視界に入れないようにしつつ、森崎は空を見上げる。

「駿！今日という今日は許しませんよ！今まで僕を馬鹿にした報いを受けてもらいますからね！」

「悪い悪い。クレープ食べるか？」
「たべるー！」
　チョロい。顔をひきつらせつつ、何度目かわからない友人の将来を心配する。雄大はお持ち帰りにクレープを更に追加購入、心なしか顔がひきつっている店主に駿は心の底から謝罪しつつ、森崎は雄大の左後ろについた。
「そう言えば駿」
「どうした？」
「君って今も僕のボディーガード何です？」
　「ありゃりゃしたー…」と個性的な店の人の声に送られた後、雄大がそう呟いた。森崎は雄大の隣でポケットに手を入れつつ言う。
「いいや？そもそも俺のボディーガードとしての任務は二年前に終わってるからな」
「ですよね。じゃあ僕と一緒にいるのは何でですか？」
　純粋な疑問で投げられたであろうその質問。しかし駿は頭をかいて、雄大の方を見ないまま呟く。
「お前が学校を忘れたりしないかの見張りだよ…お前出席日数ギリギリだったじゃないか」
「…あと二日もありましたし」

心なしか声が震えてる気がする雄大をスルーし、森崎はポケットに入れておいたマップを握りしめる。
「…もう後悔なんてしない」
そんな森崎の呟きは、隣の雄大にすら聞こえることはなく。空気に溶けるかのように消えていくのだった。

「ではまた明日」
「ああ」
駿の気配が扉の前から去っていくのを感じる。
「…なんとか今日もバレずに済んだ、か」
安堵の溜め息を一つ。リュックサックを背負い直し、廊下を歩いていった。
『やっほー雄大くん！おかえりなさーい！』
リビングに入ると、そう言いながら、一人の少女のようなナニかがこちらに向けて文字通り『飛んで』きて、僕の肩に座った。
明るい茶色のツーサイドアップ。茶色の瞳。整った顔立ち。しかし彼女を純粋な人間であると言い難かったのは、そのサイズにあった。
目測で15センチメートル。

同年代の男女に比べて遥かに小さいはずの俺の顔よりも、更に小さな、少女がそこにはいた。

少し見回せば、彼女達がいる。

高町なのは。フェイト・テスタロッサ・ハラウオン。八神はやて。ヴィータ。シグナム。シャマル。ザフィーラ。リインフォース。高町ヴィヴィオ。アインハルト・ストラトス。そして…ユーリ・エーベルヴァイン。

そう。僕は創ってしまった。この世界に存在しないはずの彼女達を、他ならぬ自分の手で。

僕には前世の記憶がある。

そう自覚し出したのは、今から6年くらい前の事だった。きっかけはわからない。何か特別な出来事があったわけじゃないし、転生というものが本当にあるのだってその時知ったのだから。

で、その時の『僕』は馬鹿だったから。こう言った状況、つまるところ『転生』には必ず特典…要は凄い能力とか才能とかそんなんだ…がついてるものだと思ってたから、高熱で変なテンションになっていたのもあいまって『Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ…』やら『開け、王の財宝(ゲートオブバビロン)！』やらを叫んでいた。幸いにして親がいなかったかつ使用人の人を一人として雇っていなかったことが幸を奏したが、あの

テンションを人に見られたらトラウマになっていたかもしれない。

結局その時に『僕』の特典は分からなかった。結構落ち込んだけど、まあ気長にやってみれば良いかなって思ったんだ。『転生』という誰にも負けないアドバンテージがあるからこそ、二度目の人生は楽しくやれるかな、何て軽く考えていたんだ。

そして僕が九歳、小学校三年生の頃。僕の『特典』が判明した。

――『夜天の書（やてんのしょ）』

それは前世の知識によると『魔法少女リリカルなのは』という創作物において主人公格である人物、『八神はやて』の所有する第一級危険指定遺産、ロストロギアに該当する『闇の書（やみのしょ）』に近い。

その初登場時ははやての生命を蝕み続け、彼女が救われる唯一の道となる書の完成をトリガーとしてその世界そのものを滅ぼすという、まさに災厄の遺産と言っても過言ではない魔導書だった。

夜天の書は、その闇の書の原本だ。正確には、『闇の書が心ない主に改悪を加えられる前の魔導書』と言った方が良いだろうけど。

…とにかく、そのとんでも魔導書が『僕』の特典だった。ついでにこの世界が『魔法科高校の劣等生』というラノベの世界であることも分かった。このことに関しては、『俺』の知識はほぼなかったと言っていいだろう。肝心な時に役立たずだな僕は。

ここまでは、百歩譲ってまだ良かった。例え黒歴史間違いなしであるような事があったとしても、僕の命が脅かすような事はない。せいぜいが十年後位に頭を抱えてベッドでのたうち回る位だろう。そう、問題は、そこからだったのだ。

さっきも言った通り僕は夜天の書を持っている。しかし、そこに書かれていた内容は、僕の知識とはあまりにもかけ離れたものだったのだ。

有り体に言ってしまえば、それは設計図。しかもただの設計図ではない。魔法…空間転移やら飛行といったような、現行の科学力では明らかに不可能であるそれらの魔法式と、一世紀跨いでも完成するかどうかわからないようなデバイスの数々。その設計図が、現行の科学でも作成可能であるかのように記されていた。

きっと、その時の僕は調子にのっていた。そうでもなければ、そこに記されていた内容がどれだけ自分の命を脅かすのかぐらい、直ぐにわかったはずなのに。

結局僕は、彼女達を創り終えるまでその危険に気づくことはなかった。

一体何が危険なのか。この世界において、魔法というものは武器として、殺傷力のある兵器として運用される。魔法を扱う者たちは一種の兵士のようなものとして扱われて教育され、その為に多大な金額が投じられている。人工で魔法師を造り出すことができないわけでもないが、それでもやはりお金というものはかかるし、人間である以上消耗だってする。

――では、もしそんな世界で『消耗しない、教育を必要としない、しかも優秀な魔法師』を創る術があったらどうだろう。更に言うなら超長距離転移を可能とする魔法や飛行技術、武器の格納技術まで持っているような。

答え、世界戦争の引き金になる。

考え過ぎだと笑うかもしれない。でも、その可能性はゼロではない。ならば、最悪の可能性は想定しておくべきだったのだ。

遅れながらもそれに気づいた僕は、急いで既存の研究データを封印することにした。しかしそれまで多くの人々に「世界を変えるような研究をしている」と言ってしまった以上、何かしらの研究成果を発表しなければならなかった。

結果、僕は最もヤバくなさそうな『カートリッジシステム』を世に発表することにした。これならいくら安くカートリッジそのものを生産できるとしてもＣＡＤとの競合がある以上、そこまで流行るような事にはならない筈だ、と。もっともそれも僕が実際にしたことは夜天の書（せつめいしょ）を読んで、その通りに機構を再現しただけの事でしかないのに。そう思っていたからか、周りの称賛の声が、若干空虚に聞こえてしまった。

しかしそれでも　本当にヤバめな技術は公表していない以上、僕の身に危険が及ぶことは少ないだろう。そう思っていたが、事態はその一年後、具体的に言えばその年の十月に一変した。

――僕は、命を狙われた。

後で聞いた話だが、その集団の雇い主だった会社は、僕の開発したカートリッジシステムを自社の製品に組み込めなかったとかで業績が悪化。借金まみれになって社長が自殺し、社員は路頭に迷うことになったのだとか。そして僕の事を恨み、その国からはるばる日本へ、僕を殺しにやって来たんだそうだ。何とか生き残った僕は、昔やっていた研究の一部の封印を解除することにした。技術がバレるリスクだとか、そんなことは言ってられない。想定でもなく、実際に僕は命を狙われたのだから、いつもう一度狙われるかなんてわかったものじゃない。なら、少しでも自分の身を護れるようなものが欲しかった。

そんなわけで、僕は今日も彼女達と共にいる。自分が死なないために。この生活を終わらせないために。

これは、そんな物語。夜天の盟主（擬き）になってしまった僕が、平和な学校生活を送るために、ひたすら主人公（お兄さま）を礼賛する物語だ。

「あれ、なんか『入学式直後にテロリストの襲撃あり』って書いてある…」

『どうしたの雄大くん？』

「いや…ちょっと一ヶ月くらい学校お休みしようかなって思いまして」

『せっかく入学したのに!?』

…たぶん。きっと。そうなるはずだ。

第2話

「疲れたァ…」

「いきなりどうした？」

いえなんでも、そう言って雄大は溜め息を吐く。第一高校通学二日目となった今日、案の定森崎の秒間16連打チャイムによって叩き起こされた雄大は昨日の事を思い出していた。…と言っても夜天の書を使うかどうか、という話をしていただけなのだが。

基本的に夜天の書は火力がバカみたいに高い。それこそうっかりで『日本滅んじゃった☆』が実現できる程度には。『明らかに過剰火力だから持っていかない方が賢明だろう』という雄大と『誰か一人でも良いから連れていくべきだ』とレイジングハート以下夜天の騎士達が対立したのである。

何時もは使わない多数決まで使って的確に雄大を追い詰めてくる彼女達に雄大が折れ、彼女達の内の一つを持っていくことを承諾したのである。

ここまでが、昨日の夜11時に行われた光景。そこから厳正なる聖戦（じゃんけん）で持っていくデバイスを決めるのに更に四時間。途中で雄大は寝たのだが、それでも疲労感は凄まじかった。

『ま、あたし達は騎士だからな。目の届かないところで主に危害が及ぶのは我慢ならないのさ』

『確かにそうかも知れませんけど…心配しすぎじゃないですかね』

最終的に勝利した彼女…ヴィータ及びグラーフアイゼンと脳内で会話する。魔法科高校は髪飾りなどの一部例外を除いてアクセサリの着用は禁止されている。

今はワイシャツの下に仕込んであるとはいえ、昨日のように咎められると不味いことになるだろう。没収などされたら目も当てられない。それもデバイスを持っていきたくなかった理由のうちの一つなのだが、彼女達には何か考えがあるらしく。

基本的に雄大本人よりもデバイス達の方が頭がいいので雄大は何も言わなかったが…

『ふふっ…家帰ったらはやて達に自慢してやろっと』

「不安だなぁ…」

「急にどうした雄大」

「いえなんでも」

暗鬱とした思いを抱きつつ、雄大と森崎は登校するのだった…

「(うわーめっちゃ見られてる)」

森崎と別れた後教室に到着した雄大は、多くの視線に晒される。何やら話をしていたであろう四人組も静まり返った教室を不審に思い、こちらを見て絶句している。
「(どーせ俺はチビですよー…)」
雄大の身長はかなり低く、小学校三年生とほぼ同じ位でしかない。おおよそ高校生とは言えない容姿をもつ彼には、かなりキツい視線が浴びせられていたのだった。
「(やべえ…おうちかえりたい)」
『大丈夫だ雄大、あたしがいる』
男前な騎士（尚中身は幼女）に慰められつつ、怒りを込めてキーボードを叩き履修登録を全て済ませた後、リュックを机の上に置いて中から本を取り出す。
「はい皆さん、席について下さーい」
若干の騒がしさが戻った教室で本を読んでいると、教室のドアが開いて一人の女性が入ってきた。
「(担任の先生かな?)」
本を閉じ、リュックサックを机から下ろして放り込む。教室には、戸惑いが充満していた。…とは言っても、さっき雄大が入ってきたとき程ではないが。その事に気付きメンタルに多大なるダメージを受けた雄大は心のなかでさめざめと涙を流しつつ、気付かれないように溜め息を吐く。

女性は教室を見渡した後、
「はい、欠席者はいないようですね。それでは皆さん、入学、おめでとうございます」
『なあ雄大』
『なんでっしゃろ』
『この学校って担任は居なかった気がするんだが』
『マジですか?……マジっぽいですね』
そんな風に脳内で会話している内に、女性が自己紹介する。どうやら彼女はこの学校のカウンセラーであるらしく、悩みやら何やらを聞いてくれると言うのだ。
「本校は皆さんが充実した学生生活を送ることができるよう、全力でサポートします。……という訳で、皆さん、よろしくお願いしますね」
女性が微笑みながら柔らかい表情でそう言うと、教室の雰囲気が一気に緩んだ。
「(サポート、か…)」
魔法を扱う上で、想子(サイオン)や処理能力等と同じ位重要なもの。それは『術者本人の精神状態』である。いくら術者の技量が優れていようと人間である以上動揺はするし、トラウマがあったっておかしくはない。しかし魔法師(魔法を扱う人々のこと)は今や貴重な存在だから、トラウマ等で使い物にならなくなっては困るのだろう。
只でさえ魔法師排斥運動が一世紀経った今でも続いているような状況だ、『魔法師は

これからの社会に必要である』という事を証明し続けなければならないのである。
　そんなことを考えていると朝のＳＨＲが終わり、クラスメートが疎らに立ち上がり、見学へと向かう。雄大も立ち上がり、リュックサックを背負って工房へと向かおうとする。
「なあなあ」
「…何でしょうか？」
　しかし、雄大はクラスメートの男子に呼び止められた。雄大の友人である森崎よりも身長が高い、さっきの四人組のうちの一人。そんな彼が、心配したように口を開く。
「…飛び級してる訳じゃないよな？」
「誰が小学生ですかッ!?」
「言ってねえよ!?…悪い悪い、俺はレオ、西城（さいじょう）レオンハルトだ」
「…まあ、いいでしょう。僕は雄大、森崎雄大（もりさきゆうだい）です、よろしくお願いします」
　本人はガンを飛ばしているつもりなのだが、身長差の関係でただの上目遣いにしか見えない。レオンハルトは苦笑すると、話し始める。
「所で雄大は何処を見学するつもりなんだ？」
「僕ですか？僕は工房です、魔工技師志望なので」
「お前もか？」

「も？」

首をこてん、と傾げる雄大。行動が完全に小動物と化している彼にレオは吹き出しかけるが、それを何とか気合いで押し止める。

「…何か今失礼な事考えませんでした？」

「そうか？気のせいだろ」

そんなことを言い合っていた二人だったが、レオが指で教室のドア辺りにいた三人組、正確にはその内の一人である少年を指差した。

「アイツ、司波達也って名前なんだが、アイツも雄大と同じ魔工技師志望なんだ」

「本人の居ないところで勝手に紹介されるのは、あまり気分の良いものじゃないんだがな…司波達也だ、よろしく」

「私は千葉エリカ。エリカでいいわよ…それとアンタ。勝手に人を紹介してどうすんのよ？これだから単細胞は…」

「あんだと!?」

レオの指差した三人が雄大のいる方へと歩いてきた。その中でもエリカと名乗った少女が、レオと言い合いを始めてしまう。それを達也は呆れた目で、もう一人の少女はオロオロとしながら見ていた。

「まあまあお二人とも、落ち着いて下さいな」

「「…分かったよ（わ）」」
「（仲良しかな？）では改めまして。森崎雄大です」
「え、えっと柴田美月（しばたみつき）です…」
「はい、よろしくお願いします」
　互いに自己紹介を終えたところで、雄大達は工房へと向かう。その途中、エリカが雄大に話しかけてきた。
「ねえ雄大。アンタの森崎ってさ、ひょっとしてあの『森崎一門』の森崎なの？」
「ええまあ…それが何か？」
「やっぱり！じゃあさ、『クイック・ドロウ』とか『ドロウレス』とかも使えたりするの？」
「『ドロウレス』は厳しいですけど…『クイック・ドロウ』位なら僕も使えますよ」
「なあ、『クイック・ドロウ』ってなんだ？」
「そんな事も知らないの？」
「まあまあエリカさん落ち着いて。…『クイック・ドロウ』は森崎一門が体系化した技術のことです。例えば…」
　そう雄大が呟いた次の瞬間、彼はエリカの背後に移動していた。
「「!?」」

「こういう風に移動するための足運びだとか、視線の反らし方だとか。相手よりも素早くＣＡＤを抜く事に特化した技術…そんな感じですね」
「全員の瞬きするタイミングが合わさった瞬間に背後に移動したのか…大した観察力だ」
「タネを一瞬で見破る君も大概ですけどね」
肩を竦める達也に、雄大が苦笑を浮かべる。他の三人はポカンとしていたが、やがてレオが感嘆の意味を込めて溜め息を吐いた。
「すっげえなあ…そんな体なのに」
「何時もだったら殴ってますけど魔法師同士の戦闘では一定の距離があるのなら体格は関係ありませんから。」
魔法師同士の戦闘は、早くＣＡＤを抜いた方が勝つと言っても過言ではない。『だったら誰よりも早くＣＡＤを抜けば良いだろ！』という脳筋の発想によって半世紀近くもの間培われてきた技術、その結晶が今の森崎一門の有名さを示している。雄大はＣＡＤの操作技術は並以上であると自負しているが、それはあくまで普通の精神状態の話であり、森崎一門の真髄である『常にＣＡＤを抜ける状態にしておく』というステージにいる駿との実力はかなりの隔たりがあると言って良いだろう。
魔法師として及第点だろうと、森崎一門においては関係のないもの。ボディーガード

を生業（なりわい）としている以上、実力に妥協は許されない。駿はその点中学校から業務を手伝っているから、雄大の何倍も高い実力を持っているのである。

…まあ彼らの場合実力の評価のしかたが違うのだが、今は関係のない話だと言って良いだろう。

「…」

司波達也は、その光景に絶句していた。あまりにも人間の理解の範疇を超えているであろうその光景は、彼の…ひいては残りの三人である千葉エリカ、西城レオンハルト、柴田美月の思考を停止させるには充分だった。

「お、お兄様。これは…」

隣の少女…自分の妹である司波深雪も驚愕を浮かべながら達也にそう話しかけてくる。達也は頷いて、呟いた。

「雄大がこんな大食いだとはな…」

彼らの前にいたのは、数十人分の食料を凄まじい勢いで食べ続ける雄大の姿だった。周りにはギャラリーが立っており、彼の事を見守っている。

事の始まりは工房の見学が終わった後。達也達一行は食堂へ向かう事となり、そこで一科生とのちょっとしたトラブルが起こったのだ。

『二科生なんて一科生のスペアでしかない』と言うその生徒にレオが憤り、一触即発の雰囲気となったところで――

『あれ？どうしたんですか皆さん』

『食堂特製‼メガ盛りチャーハン‼（８００ｇ）』を抱えた雄大がやって来たのである。席を立とうとしていた達也だけでなく、レオも一科生も、全ての人間の時間が停止した。『？』と小動物のように首をこてん、と傾げる雄大だが、今度のレオに吹き出す気力は無かった。

『な、なあ雄大』

『何ですかレオ君』

『それ…全部食うのか？』

『食べれないものを注文するほどお金持ちでもないので。それに、後数皿は食べられますよ？』

『バカな!?』

思わず、と言った感じの声が一科生から漏れる。そして雄大は明らかに自らのお腹、それどころかそこら辺の大食いチャンピオンのそれですら入らなさそうなチャーハンを机に置き、レンゲを取って手を合わせたのだった――

「…（もぐもぐ）」

そんな訳で、雄大は既に三皿目に突入したチャーハンを一心不乱に食べ進めていたのだった。因みに一科生は先程からいない。当然だろう。目の前に大食らいの見た目小学生がいるのだから誰だって距離はとりたくなる。現に司波達也だってめちゃめちゃ距離をとりたいのだから。彼がこの場所にいる理由は、単に彼の妹、司波深雪がこの場所を離れようとしないからである。

「（お、お兄さまの横にこんなに長く合法的に居れるなんて…！）」

「…ハァ」

一科生が居なくなって嬉しいのか、こんな見てるだけでお腹一杯になりそうな光景を見て辛いのか、そのどちらに自らの感情が傾いているか分からないまま、達也は溜め息を溢すのだった――

さて、放課後である。あの後四皿目に差し掛かろうとして森崎の素早いツッコミにより撃沈（決まり手：手刀）した雄大だったが、気を取り直して午後の授業、先日雄大を咎めた七草真由美生徒会長の射撃魔法の訓練を見学したり、森崎駿が達也達に謝罪すると言った一幕があり、今に至る。

「何かあったんですかね」

「かもなあ」

校門で騒ぎが起こっているのか人が集まっている。雄大と森崎がそんな会話を交わし、人混みの横を通りすぎようとした。

「いい加減にしてください！」

その声が聞こえたのは、そんな時だった。雄大は何処かで聞いたことのあるような声だなあと呑気に思い、駿は表情を真剣なものに変え一回だけ跳躍した。

「――ッ!?雄大先にいくぞ!!」

「え、ちょ、待ってくださいよ駿!!わぷっ!?ご、ごめんなさい、通してくださーい！ちょ、やめ、ヤメロォーッ!!」

友人の悲鳴を聞き流し、森崎駿は素早い動作で人混みの間を縫っていく。野次馬達の上から見たのは、雄大のクラスメートである柴田美月が声を荒げている姿だった。

「(一体何があった!?あんなに一科生が集まってるなんて…)」

「入学したばかりの今、ブルームであるあなた達が、一体どれ程優れてると言うんですか!?」

――マズイ。森崎は歯噛みした。まず、この高校には一科生と二科生がいる。そして基本的には一科生の方に成績がよい生徒が選ばれる為、一科生の事を花冠(ブルーム)、二科生の事を雑草(ウィード)と呼び差別するという伝統があり、それが今も根付いているのだ。

『森崎』からすれば情報システム上の強さと実践における強さは別物であり、それだけで二科生の事をウィードと蔑む気にはなれなかった。…あの友人に勝ち越せてない、と言うのも大きいだろうが。

それはそれとして、殆どの一科生は二科生の事を見下し、蔑んでいる。嫌悪していると言っても良いだろう。そんな見下している相手に正論でやり込められてしまった。故に、頭に血が上ってＣＡＤへ手がいってしまうのも、ある意味当然のことだと言えてしまうのである。

「だったら見せてやる‼これが一科と二科の――「そこまでだ‼」

大声を出して全員の注意を一旦引き、地を踏み締め魔法を発動。素早く加速して一科生、そして特化型ＣＡＤを抜こうとしていた二科生の二人の間に割って入った。

「言っておくが…校内では決められた場所以外での魔法使用は禁じられている。それは一科生も例外じゃない。それに、他人へＣＡＤを向けるな。犯罪行為と取られるかも知れんぞ？」

「も、森崎⁉」

約一名を除いて、驚きの目が彼へと集中する。森崎は頭を押さえて溜め息を吐いた。

「自分の実力に自信を持つのは結構な事だが…それが慢心にならないようにな」

その言葉に、一科生の何人かが苦々しい顔をする。二科生へとＣＡＤを向けていた少

年に至っては、顔を真っ赤にしてプルプルと震えていた。

「皆、落ち着いて‼」

一科生の内一人、気弱そうな少女がそう声を上げＣＡＤを起動させた。それに気付いた森崎が制服のズボン。そこにあった特化型ＣＡＤの引き金（トリガー）をひこうとしたところで

――

「!?」

術式が霧散した。発動されることなく放出されたサイオンが粒子となって光るように消えていく。

「そこまでです！」

凛とした声だった。その声の主は右手を此方に向けながら歩いてくる。森崎は、己の表情がひきつっていくのを感じた。何故ならば、その人物は――

「さ、七草生徒会長!?」

第一高校生徒会長、七草真由美その人であったからだ。

全ての人間が、その場に停止していた。十師族…日本の魔法師を纏める家々の中でもトップクラスの知名度を誇る『七草（さえくさ）』。とは言っても、彼らを押し留めていたのはそれだけではない。彼女の美貌、それはまさに妖精に相応しいと言えるほどに美しい。また、その場にいたのが全て並より上の魔法師であったこともそれに拍車をかけていたと

言って良いだろう。活性したサイオンが彼女を包み、どことなく幻想的な雰囲気を醸し出していた。そしてその横から、一人の少女が歩みでる。

「風紀委員長の渡辺だ。1―Aと1―Eの生徒達だな？事情を聞く。着いてこい」

いっそ冷たいと言えるような声で彼女…渡辺摩利（わたなべまり）がそう言う。誰もが動けない中、ただ一人。司波達也は摩利に訝しげな視線を向けられつつも前へ出た。

「すみません、悪ふざけが過ぎました。」

「悪ふざけだと？」

「はい」と頷き、森崎駿へ視線を送る。彼が軽く親指を立てたのを視界の端に捉えつつ、達也は話始めた。

「先程森崎君に頼んだんですよ『ドロウレスを見せてほしい』と。森崎一門はクイックドロウだけでなくドロウレスも有名ですから」

「それは本当か森崎？」

「―はい。僕ら森崎一門はボディーガードの家系ですから、出来るだけ実戦的なものをお見せしようかと思いまして」

「なるほど…では、そこの女子生徒が魔法を行使しようとしていたのは？」

「それは―「彼女が使用しようとしていたのは殺傷性のない閃光魔法ですよ、失明もしないほどのね」

摩利の言葉に対する返答に一瞬詰まりかけていた駿の代わりに、達也がそう答える。その瞬間、渡辺摩利がすっと目を細めた。
「ほう…君は、展開されている起動式を読み取ることができるようだな」
「実技は苦手ですが、分析は得意ですので」
「…どうやら誤魔化すのも得意のようだ」
尚も達也を射抜くような眼差しを向けていた摩利だったが、ここで森崎と深雪が前へ出た。
「お兄さまの言うとおり、本当にちょっとした行き違いだったんです。先輩方のお手を煩わさせてしまい申し訳ありません」
「先程も申し上げましたが、ボディーガードとして、より実戦的な形式で披露した方が良いかと思いまして。クラスメートが熱の入った演技をしてくれて助かりました」
そう深雪は頭を下げて言い、森崎が嘯く。「まあまあ」と真由美が摩利を押し留め、達也の方を振り返った。
「いいじゃない摩利。達也くん。本当に行き違いだったのよね?」
「…ええ」
名前で呼ばれていることにツッコめないまま、真面目くさった表情で達也が頷くと、真由美はどことなく得意げに見える笑顔を浮かべた。

「生徒同士での教え合う事はとても良いことですが、魔法の行使に関しては細かい制限があります。授業でそれに関連することを習うまでは、魔法関連は自重しておくべきでしょう」
「――会長もこうおっしゃられてることだし、今回は不問としよう。以後気をつけるように」
　全員が頭を下げ、真由美と摩利は歩き出す。しかし、途中で摩利が振り返って言った。
「そういえば、君の名前を聞いていないな」
「……1―E、司波達也です」
「覚えておこう」
　そう言って、今度こそ摩利は去っていくのだった…
「…すまんな」
　摩利が去り、一科生が森崎達を睨んで去っていった後。唐突に森崎がそう切り出した。
「目をつけられただろう、司波達也」
「構わない。…遅かれ早かれこうなっていただろうしな」
「そうか…改めて名乗ろう。俺は森崎駿。森崎の本家に連なる者だ」
「司波達也だ。よろしく頼む」

「ああ…だがその前に」
森崎が唐突に振り替える。そこには誰も――否。そこには彼がいた。
「きゅ～…」
目を回して倒れている、森崎雄大が。
「あいつを回収しなきゃな」
「…大丈夫なのか？」
「お湯でもかけておけば治るだろう」
「だ、誰がカップ麺ですか…ガクッ」
こうして、彼らの二日目は終わった。なおこのあと、森崎駿が雄大を抱えて帰ったことは言うまでもない。

第3話

――声が聞こえる。
――悲痛な声だ。
――悲しい声だ。
――でも、その声は。
――どうしようもなく、空っぽだった。

魔法…その中でも現代魔法と呼ばれるものがある。起動式を頭の中で組み立て、それをＣＡＤに打ち込む。するとＣＡＤはその通りに魔法式を作り出し、事象の情報体（エイドス）へ転写。こうすることで、現在起こっている事象を書き換えることが出来る。どうしてこんな話を始めたかと言うと、現在Ｉ――Ｅは実習授業中だからである。

「風紀委員…ですか」

そこにいた身長の低い少年…勿論のこと雄大である…が、そう口にした。彼の周りには、四人の少年少女がいる。

「ああ…全く妙な事になったよ」

溜め息と呆れをふんだんに含んだ言葉を吐き出す少年…司波達也。彼は今日の昼休み、なんやかんやで妹の司波深雪から生徒会役員に推薦され、何を血迷ったのか風紀委員長が達也を風紀委員に推薦。何故か風紀委員をやることになってしまったのだった。

「で、でも風紀委員って実力が重視されるんですよね?そこに推薦されるなんて凄いことなんじゃ…」

恐る恐る、といった風に話したのは柴田美月だ。彼女はずれた眼鏡を直しつつそう言う。それに対し達也は、実習用の機械に手を当てつつ言った。

「実力、っていっても様々なものがあるけど。大体は魔法の実技だろう?」

達也の左手に、光が纏わりついていく。彼が手を当てたまま右手を前に出すと、台車が移動した。

ピッ、と機械が数字を刻む。そこに表示されていたのは、ここの高校で劣等生とされる二科生の中でも、下から数えた方が早いのではないか、と思えるほどに遅い数字だった。

「昨日も言ったけど、俺は実技が苦手なんだ…それに、二科生が風紀委員になると必ず何処かで反発が起こってしまう。」

「にしてもよぉ、威張るだけしか能のない一科生より達也が風紀委員になったほうが良いって思うんだよなー…」

「あ、エリカさん。あなたの番ですよ」
「え、本当だ！ゴメンゴメン」
　達也がそう言って列の後ろに向かい、エリカは右手を台車に当てる。この実技は、魔法を発動する早さを見ることが出来る。台車を加速し、レールの端で停止。そこから逆向きに加速させ、端で停止…という風に魔法を発動する。これを三セット行うまでの時間を計る、というものである。
　小さく、エリカがガッツポーズをした。どうやらよい結果だったらしい。雄大はポケットの中で宝石、基（もとい）スリープモードのレイジングハートを弄びつつ、そんなことを考える。
　その次は、雄大の番だった。ペダルを回して自分の身長に合わせつつ、機械に手を置く。
　その右手が、活性化したサイオンに包まれた。雄大は目を閉じ、右手を前に出す。
　台車が動き、機械が数字を弾き出す。その数字は、先程の達也のそれよりも遅かった。雄大はため息を吐いて、機械の高さを元通りにし、列の後ろ…つまり、エリカ達の方へと歩いていく。
「どうも」
「あ、お帰り雄大。どうだった？」

「上々…と言いたいところなんですけどね、かなり厳しいです」

苦笑を浮かべながらそう言う雄大。森崎というビッグネームを持つ魔法師にしては余りにも遅すぎるその行使秒数に、クラスのあちこちから視線が集まっていた。

「(やっぱり何時まで経ってもこの視線には慣れませんね)」

『Ｄｏｎ，ｔ　ｗｏｒｒｙ，ｍａｓｔｅｒ．』

「(ありがとうございますレイジングハート)」

心の中でレイジングハートに礼を言って、雄大はクラスメートが台車を動かしていくのを見ながら、ぼんやりと考える。

レイジングハート。それは雄大が作った初めての『インテリジェントデバイス』にして『カートリッジシステム』を世間に公表する前から搭載していたデバイスの一つだ。

基本的には射撃系統、その中でもサイオン塊射出魔法…つまりはサイオン弾の魔法を得意とする。デバイスに搭載された人工知能及びサポートシステム『不屈の魂(エース・オブ・エース)』と『星光の殲滅者(シュテル・ザ・デストラクター)』の超高速並列演算システム『マルチタスク』によって魔法の制御を高い水準で行うことができるが、逆に早さがネックとなってしまう。誤差には多少の前後があるものの、平均しておおよそ１５０ミリ秒。現代魔法においては致命的なそれによって、一時期『森崎家の恥さらし』何て呼ばれた経験もあったが…今では良い思い出だ。

「まあ達也くんなら何とかなるんじゃないでしょうか？」
「…どうしてそう思うんだ？」
「何となく、ですかねぇ。達也くんって結構万能なイメージありません？」
「あ、それ私も思ってた！」
　達也は雄大を見てため息を吐き、先程の実技試験の目をそらしたくなるような結果をしっかりと自覚する。
　…半ば現実逃避じみていたのは気のせいだろう、きっと。

「九重（ここのえ）先生、おられますか？」
　翌日明朝。達也は朝の稽古に来ていた。彼が声を張り上げても返事は帰ってこない。不審に思い、一歩踏み出す。瞬間、達也は咄嗟に裏拳を放った。
「ッ!?」
「おっと。危ない危ない、危うく良い一発を貰うところだったよ」
　彼の裏拳を止めたのは、一人の男だった。髪をきれいに刈り上げ墨染の服を着た僧侶のような見た目をしているものの、滲ませる雰囲気は何処と無く胡散臭い。俗っぽいと言ってもいいだろう。彼の名は九重八雲（ここのえやくも）。達也の師匠である『忍術使い』である。
「九重先生、調べていただきたい相手が居るのですが」

「うーん、このタイミングだから…うん。森崎雄大君かな？」
「ご存じなのですか？」
「うん。…森崎雄大。誕生日は七月三日。年齢は十五歳で、十二才の頃にご存じ『カートリッジシステム』を作製。それより前、大体十歳の頃にはもう原型ができてたって話だね…でも、妙なことがあるのさ」
　いつも通りの勿体ぶった言い方に、達也は眉をひそめる。
「そんな顔しなくても、ちゃーんと教えるよ。彼にはね、九歳以前のデータの一切が存在してない。」
「存在しない？」
「表向きは病弱だったからって理由らしいけど…」
「その言い方だと、裏側を知っていらっしゃるんですね？」
　九重は相も変わらず胡散臭そうな笑みを浮かべて「そうだよ」と言って話し出す。
「全ての始まりは、六年前。ある一家で起こった強盗殺人事件だ。」
「強盗殺人とは…穏やかじゃないですね」
　そう言う達也に、九重は苦笑を浮かべて話を続ける。
「被害者はある魔工技師の一家。世間にはあまり知られていない、知る人ぞ知るって感じのね。犯人はどこかの国の間者（スパイ）だってこと以外は何も分かってない。ＵＳＮＡとも

言われてるし新ソ連とも言われてる。…まあ日本の人間じゃないってことさ。」
「では、何故スパイだと?」
「死んだのさ、一人残らずね。」
　司波達也の顔色が変わる。九重はそれに気づかないように、あくまで客観的な事実を述べていった。
「死因は、まあスパイには結構ありがちな自害…ということになっている　。」
「なっている、とは?」
「司法解剖じゃあそれ以外に死因が説明できなかったのさ、でも―」
「?」
「数時間は毒が回っていなかった。」
「!?」
「被害者が彼に事情を聞こうと思って彼を離した瞬間、犯人の全員が苦しんで死んだそうだよ…何か特殊な魔法が使われた、と見るべきだね」
「それでその被害者がアイツだと?」
「その時の名前は違うけどねぇ、その後彼は身寄りがないため、父の親戚である森崎家に養子として拾われたんだけど」
「けど、とは?」

「サイオン量が余りにも多かったのさ、それこそ無限にあるんじゃないか、と思えるほどにね」

曰く、サイオン量を測定する際に、余りにもサイオン量が多すぎて機械がエラーを起こした。曰く、並の魔法師では近づくだけでサイオン酔いを起こす。曰く曰く曰く――

「――それは、何というか。何故一科生じゃないんですか？」

「それをさっ引いても魔法師としては欠陥品としかいえないような成績だったらしいからねぇ、それにいくつかの話に関しては眉唾だ、話半分に聞いておくべきだと思うよ？」

からからと笑う九重だったが、達也の表情は優れない。

「（――一先ずは観察、そこからだな）」

そんな達也を、九重は胡散臭い笑顔を浮かべつつ見つめていたのだった――

原始、人は正に動物であった。それ故に、人は闘争から逃れることなどできはしない。そしてそれは、森崎雄大も例外ではなかった。

「ぎゃあああああッ!????」

第一高校の一角に、小さな少年の悲鳴がこだまする。この少年、森崎雄大は五科目筆記試験の平均点９３点、魔法工学、基礎魔法理論では小論文で惜しくも満点には届かなくとも、他の受験者よりかなりいい点を取っている。また実技試験に関しても、後二百

ミリ秒早ければ確実に一科生入りしていたと言われるほど優秀だ。また、小学生としか思えないような見た目だからこそ、マスコットになりやすい。事実、1―Eでは、雄大は既にマスコットになりかけている。本人は断固として抗議しているが、「だがそれがいい」と言うファンも多い。なんだこの学校。

とどのつまり、雄大を得ようとする部活はかなり多い。それがこの光景の理由だった。

「森崎雄大くん！是非うちのSSボート・バイアスロン部に入らない!?」

「いや、ここは是非クラウド・ボール部に！」

「助けて風紀委員さぁぁん!!」

勧誘期間中に入った部活は、優秀な生徒を部活に入れたいと願うだろう。で、雄大は見た目からして見つけやすいし捕まえやすい。

「駿ー!!達也くーん!!」と叫びながら疾走する雄大。彼の右手に握られたバルディッシュ（おもちゃ）が酷く頼りなく見える。

「何であの人たちこっちが物騒なもの（見た目のみ）持ってんのに追ってくるんですか!?怖い!!この高校怖い!!」

『ゆ、雄大落ち着いて!!』

『あ、前からも人来た』

「いやぁぁぁぁおうちかえるぅぅぅぅ!!!!」

幼児退行を起こしつつ、第一高校を縦横無尽に駆けまわる雄大。その間にも彼を追う人々は増え続け、既に五十人に到達しようとしていた。

「達也くん助けて下さぁぁぁぁい‼」

「うおっ!?ふ、風紀委員です！それ以上の勧誘は過剰と見なされる恐れがあります！」

「「「「知るかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ‼」」」」

「……すまない雄大、無理そうだ」

「でっすよねーー！」

さすおに（流石のお兄様の略称）でも血走った目で叫ぶ軍団に恐れをなしたのだろう、雄大と共に逃げ出すはめとなった。

『…一発ぐらいなら誤射かも知れないですよね？』

『バカなこと言わないの！』

ちょっと暗い感情を抱きかけたのをフェイトに咎められつつ、達也と共に疾走していく。今ここにあるバルディッシュはあくまでおもちゃだから、魔法を扱うことはできない。出来なくはないのだが態々するメリットがない、と言ってもいいだろう。怖くて思考から抜け落ちているとも言う。

そして、数十分程時が経った。

「ぜひゅー、ぜひゅー、ぜひゅー…あ、ありがとうございます達也くん、助かりました」
「なに、気にすることはないさ。…ちょっと可哀想だったし」
何とか全ての追手をまくことが出来た二人は木陰で一休みしていた。雄大はあまり良いとは言えない顔色を精一杯笑顔に変えつつ、達也へと礼を述べる。尚達也は一切息をあげた様子もなく、襟を直していた。
「そう言えば…」
「どうしました?」
「その斧みたいなのはＣＡＤか?」
達也が指差したのはバルディッシュのおもちゃだった。雄大はそれを器用にもくるくると回しつつ答える。
「これはただの玩具ですよ。変形する特化型ＣＡＤの試作品みたいなものです」
「変形?」
「えーと、ここをこうして…と」
《Ｈａｋｅｎ　ｆｏｒｍ》
機械的な音声が鳴ったかと思うとガシャン、と音をたてて斧の刃に当たる部分がスライドする。９０度程回転したその部分、正確にはその下側からプラスチックの刃が飛び出した。

「ここの刃の部分に硬化魔法を刻印して使うんです」
「…なるほど、これは―」
「ええ、闘いづらそうでしょう?」
　つまりは、そういうことだった。魔法師との闘いでは、間合いなどあってないようなもの。しかも変形したバルディッシュの形は斧よりも鎌に近く、扱いが難しいのは言うまでもない。
　雄大がこれを作った理由?.夜天の書を再現するため、それ以外に理由など有りはしない。夜天の書にあった設計図を再現するため、部品なども一から作り出して形だけでも作った結果、何とも形容しがたいものができた、というのが当時の雄大の主観であった。尚、完成品は雄大の背負っているリュックの中にスリープモードとして入っていることを付け加えておこう。
「折角『カートリッジシステム』も搭載したって言うのに」
「…カートリッジシステムだと?.あの『火力中毒者専用システム』と言われた?」
「やめてください、その呼び名は僕の心にキます」
　カートリッジシステムを扱う際、どうしてもつきまとう問題点として上げられるのは術式を展開するスピードだ。当たり前と言えば当たり前なのだが、カードリッジをロードする時間が必要な関係上どうしても後手に回りやすい。しかし火力は絶大、マトモに

食らえば十文字家の『ファランクス』でさえ危ういと言わしめるほど。…そんなピーキーなＣＡＤを使う者が少ないのは、当然の流れだったと言える。

　事件が起こったのは、カートリッジシステム開発から二年ほど後。九校戦の新人戦、アイス・ピラーズ・ブレイクでの事だった。

『情報強化？知るか！初手カートリッジ六発リロードからの振動系魔法でワンパンじゃい！』

　…九校戦の禁止項目に『カートリッジシステム搭載ＣＡＤ』が追加されたのも、当然の結果と言えるだろう。そして、その時の余りにも酷かった試合内容から『火力中毒者専用システム』という二つ名を頂戴することになったのである。

「まあＣＡＤやらの構造は一切入ってないので、玩具と何ら変わりはないのも事実ですけどね」

「…」

　達也の呆れたような視線が雄大に突き刺さる。雄大は斧へと形状を戻し、立ち上がる。

「今日はありがとうございました達也くん。また明日会いましょう」

「ん？まだ最終下校ではないはずだが」

「待ち人がいますので。では失礼ー」

「…ああ」
若干顔色が良くなった雄大のその言葉に、達也は頷き、雄大は立ち去っていく。
「…」
しばらくの間、雄大の去った方角を見つめていたが、視線を外して。達也も別の方向に去っていくのであった…

先の勧誘期間中に知り合った先輩…壬生紗耶香に誘われて、『同盟』に参加することになった雄大。詳しい説明をするために仲間がいるという建物へとやって来たのである。
「やぁ始めまして、森崎雄大くん」
そこにいたのは、大袈裟な仕草をとる男だった。ひょろっとした体つきに縁なしのだて眼鏡。年齢は三十前後。学者か法律家といった見た目をしている。
「…貴方は?」
「僕は司一。歓迎するよ…君が我々の仲間になることをね!!」
男の目が、怪しい光を放った。雄大は何とか目を抑えようとするも叶わず。彼の目を視てしまった。雄大の手から力が抜ける。
「なっ!?う、あ……」
「そうだね…この際だし、君の兄に君は嫉妬心を抱いてることにでもしてしまおうか。」

「し、駿に…僕は……あ、ああ……！」
『雄大！くっ、何とか思考を操作させて…』
雄大は頭を抑え、苦しげな声を漏らす。司一は大きく手を広げて、雄大の後ろにいた人物に言う。
「さて、感謝するよ壬生君。彼は頭も回る人間だ、それに暴走されちゃ手に負えない。敵に回すべきではないからね」
「……はい」
司一の蔑むような笑い声が、しばらくの間建物中に響いていた。

その日の夜、雄大の家から怪しげな、それでいてどこか機械的な声が響く。
『我ら、夜を称える騎士』
『我ら、主を守護する者』
『星は夜を彩り』
『闇は夜を包む』
『――しかし』
『その星光が夜を害するならば』
『その闇が夜を奪わんとするならば』

『我ら、その明星を破壊するを厭わず』
『我ら、その闇を祓うを厭わず』
『雷は夜を揺蕩い』
『風は夜を流離う』
『誓いはここに有り』
『『『我ら、守護騎士ヴォルケンリッター。起動許可を』』』
『管制人格、リインフォース Ⅰ。起動を承認』
『同じく管制人格、リインフォース Ⅱ。起動を承認するです』
『永遠結晶エグザミア、ロードを開始……出力、0．00000000001%にて発動。仮称洗脳魔法、夜天の書の参照により邪眼と判明。解除を』
『湖の騎士シャマル、命令を承認。解除開始…完了』
『報復措置…主の命令が存在しないため発動不可と判断』
『防衛システムナハトヴァール。隔離存在としての生成を開始……完了』
『リインフォースアインス、及びツヴァイ。ナハトヴァールの制御を』
『了承』
『システム U ― Dの起動を開始する』
『主の記憶改竄完了。一日の猶予を持って、我々は活動を開始する』

『『『了承』』』

「う…うーん…うーん…」

次々と聞こえる、機械的な音声達。その全容を知るのは、魘されている主と、宙に浮き輝く一冊の本だけだった。

第4話

「しっかし、珍しいな」

第一高校、1―Eの教室。そこにいる一人の少年が、ため息混じりに呟いた。彼の名は西城レオンハルト、雄大に初めて話しかけた勇者である。その言葉に、机でタイピングをしていた少年…司波達也が画面に目を向けながら言った。

「何がだ?」

「雄大だよ。アイツ今日は風邪で休みなんだろ?予防とか真面目にやってそうなイメージ何だがなぁ…」

そう。森崎雄大は、今日学校を休んでいる。朝にカウンセラーである小野遥(おのはるか)がやって来た時に『本日森崎雄大君は風邪により欠席です』とだけ言っていたのだ。

「(森崎雄大、か…)」

森崎雄大…最近の達也の中でトップクラスに警戒しておくべきだと己の勘が告げる人物。

九重から聞いた情報。それを達也も個人的に調べてみたものの、あの夜に寺で聞いた話以上のものは得られなかった。

強いて言うなら、今も病院に時折通っているというものがあったぐらいだ。とはいってもその病院に不審な点は見られなかったし、通っている理由も『サイオン量異常』となっているため、ほぼほぼ無関係だと言っていいだろう。

「(さて…)」

思案する達也。彼の思考は既に、今日の取り締まりをどうやって凌ぎきるかということに向いている。昨日、剣道場でCAD二個を用いた『キャスト・ジャミング擬き』を披露してしまった為、一科生の優秀な方々から後ろ暗い感情を向けられることは間違いないと言っていいだろう。森崎駿や光井(みつい)ほのか、北山雫(きたやましずく)のように二科生だから、と言って差別をしない人物の方がこの学校では希なのだ。それは間違いないと言っていいだろう。

「…よし」

ディスプレイを閉じたかと思うと、達也は立ち上がり、レオンハルトと共に授業へ向かうのだった。

さて、そんな感じでナチュラルに司波達也に警戒されている雄大であったが、そんな彼は今。

「――――暇だッ!!」

ガッツリと暇をもて余していた。朝起きたときには確かに熱は３９．８度ぐらいあったように思うのだが、ついさっき体温を測ったら僅か３６．６度しかなかった。
布団をゴロゴロとしつつ、寝間着のまま「あー」やら「うー」とうめき声を漏らしていた雄大だったが、ふと立ち上がるとガッツポーズをして、
「よし、ではデバイスの調整をしましょうそうしましょう…リイーン」
「お呼びですか、マイスター雄大」
声をかけると、彼の前に二人の人物が現れた。
一人は、黒いノースリーブのコートを着た腰まで届く銀髪に紅い瞳をした女性だった。彼女の背中からは二対の黒い翼が生え、電灯の光を受けて怪しく光っている。
もう一人は、女性とは正反対の白いノースリーブのコートに蒼い瞳、腰まで届く銀髪をしている。彼女に翼は生えていないが、さらに目を惹くところがある。
小さいのだ。といっても、雄大のように身長が小さい、というわけではない。彼女の全長は、おおよそ十五センチメートル。当然のように浮いている彼女ともう一人の女性は、仰々しい礼をする。
『エグザミア』の調整をしようかと思います、アインスさんはユーリさんを呼んできてください。ツヴァイさんはそのついでとしてデバイスの調整を行う予定ですので皆さんを」

「了解（です！）」

去っていく二人を尻目に、雄大はモニターを出現させる。本棚からいくつかのファイルを取り出して、机の上に放っていく。

「えーと、工具は確か…ここにっと」

スーツケース大の工具箱を引っ張ってきて、机のそばに投げておく。修正システムを起動して、ダウンロードを待つ。

「お呼びですかマスター！」

「ええ。エグザミアの調整をさせてもらおうかと…なるべく出力ではなく効力をダウンさせるようにできれば良いんですけど」

永遠結晶エグザミア、というものがある。本来はそれは夜天の書に存在していない。それはあくまで改悪された後、『闇の書』になってから搭載されたものだからだ。しかしなんの因果か雄大の得た夜天の書には何故か彼女…エグザミアにアクセスするためのシステムである砕け得ぬ闇（アンブレイカブル・ダーク）ことユーリ・エーベルヴァインが搭載されていたのである。

そして何の因果か、彼女も夜天の書の騎士の一員になってしまっていた。彼女自身が望んだことである以上雄大はなにも言わないスタンスだったのだが、そんな彼女には困ったことがある。

「じゃあ脱ぎますね！」

「ユーリさんステイ! 絵面的には非ッ常に不味いですよ!?」

それは、彼女がとても純粋無垢だと言うことだ。赤ちゃんはコウノトリが運んでくるものだと思ってるし、世の中にはいい人しかいないとも思っている。そんな彼女だからこそ、と言うべきか。時折このように突拍子もない行動をすることがあるのだった。

慌てて自分の顔を隠す雄大だったが時既に遅し。ツヴァイが連れて来た騎士、つまるところインテリジェントデバイスの皆に上着を脱ごうとしていたユーリと顔を隠す雄大を見られてしまった。

「……」

「……遺言はあるですか?」

「待ってくださいツヴァイ落ち着いて考えましょうそもそもユーリさんがいきなり脱ぎ出す癖があるのは皆さんご存じでしょうにどうして僕が責められなきゃいけないんですかおかしいでしょう」

『……マスター』

いつもとは違う、硬質的なサポートシステム達の声。それを聞いた雄大は無言で正座をし、傍らにいた狼の形をしたロボットに命令する。

「ザフィーラ、結界の構築をお願いします」

『もう終わってるぞ主。…達者でな』

「はーい」
『それじゃあ、少し、頭冷やそうか…?』
　次の瞬間、雄大の目の前にいくつもの光の奔流が現れて、抵抗することもなく呑まれていった。…しかし、数秒程後だろうか。唐突に視界がクリアになる。
「ただいま戻りました」
『おかえりマスター。…また馴染みだしてるの?』
「みたいですねえ。昔は、というか数週間前まではこんな即時再生機能はついていなかった筈なんですが」
　体を起こした雄大は改めていくつかのモニターを出し、ファイルを手に取る。
　雄大は、無意識のうちに自らの心臓に手を当てていた。辺りはデバイス達の話し声で賑やかなはずなのに。その脈打つ音が、やけに耳に煩く聞こえていた。

「…それで、何の御用ですか?」
　風邪から復活した雄大。『同盟の資料作成役』という役まわりを任された為に毎日図書室やら職員室やらを駆けずり回っていた彼だったが、そんなある日のこと。突然、壬生紗耶香、基『同盟』の先輩方に呼び出された雄大は、口の端をひくつかせながら問いかけた。問いかけられた先輩は、椅子に腰かけたまま口を開く。

「先日、放送室を占拠し全校生徒、及び生徒会に我々の主張を伝えた。知っているな？」
「ええまあ。」
正直犯罪行為にしかなってませんけどね、という言葉は飲み込んだ。下手に波風を立てるべきではないと考えたからである。鍵を普通に先生に借りに行けばよかったんじゃないか、という主張は残念ながら取り入れられず…ひょっとしたら取り入れられてるのかも知れないが…先日風紀委員が出張る程のちょっとした騒ぎになったのだった。
「風紀委員には駿やら達也くんやらが居るというのに何やってるんですかね」とはことの顛末を聞いた雄大の弁である。
それはそれとして、何故かその騒動の際に風紀委員と共にやって来た七草生徒会長が同盟との話し合いを許可したと言うのだ。雄大からすれば準備期間を短くすることで同盟が本当にしたいことは何か、というところをみたいのかもしれない。
『…勝手なイメージなんやけど』
『何ですはやてさん』
『あの生徒会長やったら面白そうだからって理由で許可しとる気がすんねん』
『……否定はできませんね』
「――その日、『決行』する」
「え？アッハイ」

脳内ではやてと話をしていたせいで先輩の話を聞き逃してしまった。しかし聞き直すのも億劫であるし、とりあえず返事をしておくことにした。後で壬生先輩辺りに聞いておけば良いだろう、そう思った雄大は「じゃあもう帰って良いぞ」という先輩に礼をして退出する。

「…なーんかきな臭いですよねー、っと。達也くんじゃないですか」

「ん?ああ雄大か、部活にも入っていないのにこんな時間まで残っているなんて珍しいな」

「まあ、色々ありまして」

苦笑する雄大。達也は何時も通りの無表情だったが、口に手を当てていた雄大の顔、正確には手首を見て怪訝な顔つきをする。

「雄大、そのリストバンドは?」

「ああこれですか。最近入った同盟の人達から貰ったんですよ。あんまり良いセンスとは言えませんよねぇ、これ」

「……」

あははー、と軽そうに笑う雄大だったが、それと対称的に達也の顔は真剣なままだった。雄大は内心で首を傾げたがそんなことはおくびにも出さず。しばらく話をした後、互いに去っていった…

「(…厄介なことになったな)」

赤と青のラインで縁取られた白い帯のリストバンドをチラチラと見せながら去っていったクラスメート、森崎雄大を見ながら司波達也は思案する。エガリテ、そしてブランジュを背後に抱えている組織『同盟』。そのメンバーは二年生及び三年生しかいないと思っていたが…どうやらその手は既に一年生にも回されていたらしい。

静かに、溜め息をつく。先日の同盟の様子では思考がどうやらおかしなことになっていると思っていたが、雄大は比較的まともで居るらしい。壬生紗耶香の一件や風紀委員の取り締まりの際の嫌がらせ等様々な関わりを一方的に持たされている同盟だったが、正直な話彼らの思考はまともであるとは言い難かった。同盟のメンバーは全員マインドコントロールを受けているのではないか、と先日九重八雲から情報を得た時にはそう思っていたが…考えを改める必要がありそうだ。

そこまで考えた司波達也だが、すぐ近くに風紀委員本部のドアが迫っていることに気がつき、意識を切り替える。

「(――最悪の場合は)」

そう、己の存在理由を胸に刻んで。

「あー、緊張する…」

雄大がネクタイを少しだけ緩め、パタパタと仰ぐ。本日は、待ちに待った生徒会との討論の日だった。雄大本人がそれに参加しているわけではないのだが、自分の作った資料が差別撤廃への第一歩を踏み出すことができるかどうか、ということに対してとても緊張していた。ＣＡＤ調整者としての矜持（プライド）から一切の妥協をせずに作り上げた資料である…と言っても数枚程度だし、渡した先輩には最後に使うよう言っておいたが。

恐らくだが、雄大が数日頭を絞った程度の資料では、七草生徒会長にあっさり論破されてしまうだろう。生徒会長本人にその気があるかどうかはかなり疑わしいが、もし「一科生は二科生よりも優れている」という意識が生徒達の間で芽生えてしまえば差別撤廃への道がかなり遠退くどころかほぼ不可能になるといって良いだろう。

「ふう…」

深呼吸をして、意識を切り替える。既に討論会が始まっている以上、もう雄大にできることなど何もない。人事を尽くして天命を待つ、とは昔の偉い人は良いことをいったものである。

「…まあ、待ってても仕方がありませんね。レオ君達の所に行きましょう」

呟き、歩き出す。彼の右手には何時からそこにあったか、一冊の本がある。剣十字をあしらった表紙が見えるその本は、光に照らされることはなく、しかして夜のように吸

い込まれそうな輝きをもっていた。
「…何故君がここに？――ッ‼」
　ぼーっとしたような表情で話しかけるようにいった雄大だったがそれは直ぐに真剣なものに変わる。近くから聞こえた爆発音。それは確実に、招かれざる客を示していた。
「バルディッシュ‼」
《Ｙｅｓ，ｓｉｒ》
「フェイトさん、レヴィ‼」
『『任せて‼』』
　本が開かれ、その中から三角形の黄色い、石のような物が飛び出す。それを雄大は掴み取り、何かを呟く。すると石は光に包まれ、光がやんだときには巨大な斧の形になっていた。
「フェイトさん、レオ君達と合流するつもりなのでナビゲートをお願いします。レヴィはなるべく魔法が非殺傷になるよう制御を」
『分かった！その廊下を右に曲がって‼』
『バルディッシュ、スピード上げるよ‼』
《Ｙｅｓ，ｓｉｒ》

雄大が駆け出す。彼が一歩踏み出すたびに足元に三角形の魔方陣が表れ、彼のスピードをどんどん上げていく。そのまま数分。雄大は謎の男達がいるところに遭遇した。
「フォトンランサー!!」
《Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ》
斧を一回、二回と回すとそれに呼応するかの如く雄大の周辺に黄色の魔力球（スフィア）が出現する。雄大が斧を降り下ろすとそれらは直線的に進んで謎の男たちに被弾、彼らの意識を刈り取った。
「遅い…けど、飛ぶ訳にもいきませんか…」
『三次元軌道とか？』
『あれやると酔うんですよね…三半規管耐性ってあげられましたっけ』
そんな会話を脳内で垂れ流しつつ、雄大は駆けていく。建物の中を一通り駆け回ったが、レオ達と合流する事は叶わなかった。ならばこの乱戦の地。どこかで闘ってるに違いない。そう考えた雄大はとりあえず今ここにいる男達を殲滅させることを選択した。右手の斧を振るい、フォトンランサーをひたすら直撃させていく。
「慌てるな!!アンティナイトを使え！」
男のうち誰かがそう叫ぶと、一人の男が小さな石を取り出した。雄大は身構え駆け出そうとするが、直ぐにつんのめってしまう。加速力…正確に言えば『魔法で産み出した』

力が失われた感じだ。
「（ＡＭＦかな？）」
『似たようなものではあると思うよ』
慌てず再び足を踏み出し、相手の背後に回り込む。森崎の技術の結晶（のうきんせんぼう）ことクイックドロウは、本日も絶好調であった。そのままバルディッシュを反転させ、背中に突きだす。
「のぼおっ!?」
揉んどりうって転がっていった男を冷たい目線で見つめ、一言。
「…テンション上がってきた」
なんだこいつ。
それはともかく、雄大の周りは死屍累々といった様子で、地面の一部からはプスプスと煙が上がっている。一応いっておくとここの煙は敵方の銃撃によるものであって、雄大のフォトンランサーによってついたものではない。そもそもフォトンランサーは一言で言ってしまえば『飛ぶスタンガン』であり殺傷性は皆無に近いといって良いだろう。
しかし、煙の中から出てきた雄大の目は据わり、右手の斧からはバチバチと閃光が迸（ほとばし）る。つまるところ、ただのヤベー奴にしか見えなかった。
「あ、悪魔……！」
男の一人が、震える指で雄大を指す。それに対し雄大は――嘲笑（わら）った。

「悪魔で……構いませんよ…」

くるくる、くるくると斧を回していく。いつのまにかその形状は斧と言うよりも鎌になっていて、三日月のように裂けた口元も合間ってまさに死神と言う名が相応しい感じだった。

そしてそれを男たちに向け、スフィアを待機状態にしたまま叫ぶように言った。

「悪魔らしいやり方で、戦わせていただくだけですので!!」

司波達也は、乱戦の場と化した第一高校の敷地内を駆けていた。侵入したテロリスト達を吹き飛ばしていくその手付きには、一切の乱れが見られない。慣れていると隣にいる森崎駿にさえ感じさせるような手付きだった。その森崎は両手に拳銃型の特化型ＣＡＤを構え、達也よりややペースが落ちるものの男たちを吹き飛ばしていた。

「慣れているな」

「そうか？お前も大概だと思うが…な！」

駿が銃口に値する部分を敵に向けることなくＣＡＤのトリガーを引く。ドロウレス…森崎家の秘伝の中でも只一つ、駿自身が開発した技だった。特化型ＣＡＤを最大限に活かせるような技術。それは一言で言ってしまえば『座標や変数関連のデータを全て直感で決めること』である。そうすれば魔法を外すというリスクと引き換えに早い速度で

魔法を発動できる。…どこぞのショタに負けないように作った技術ではあるが中々良い出来だと思っている駿だったが、本人以外は誰も出来ないことは言うまでもなかった。

「駿――！」

ふと、駿は件（くだん）のショタの声を聞いた。そちらを見ないままバックステップをすると、目の前を光が通過していく。それはそのまま横からやって来ていたテロリストに直撃、今までと同じく意識を刈り取った。

「あれ、達也くん達も一緒ですか？」

「……ああ」

返答に間があった気がするが、まあそれはそれ。雄大は帯電する鎌を後ろ手に構えつつ、皮肉げな笑みを浮かべていた。

「…状況はどうだ？」

「大体は学生が押してますね、後一時間もしないうちに完全制圧できそうです」

「違う。お前自身だ。」

駿があえてＣＡＤを構えつつ雄大に問う。達也は思わず雄大の顔を見た。彼の顔には大量の脂汗が浮かび、青白い色をしている。歯はガチガチと鳴らされ、手は血が出るほど固く握りしめられていた。

「…正直なとこヤバイです。今も君を、森崎駿を、司波達也を、司波深雪を、千葉エリカを、西城レオンハルトを、テロリスト達を、この場にいる全てを壊したくないのに壊したい。殺したくないのに殺したい。だから――」

その言葉が最後まで続けられることは無かった。駿の魔法が雄大の意識を刈り取ったからである。膝をついてゆっくりと倒れ伏した雄大を肩に担ぎ、達也を見る。

「…詳しい説明は後だ。お前らは図書室に向かってくれ」

「――大丈夫なのか？」

達也のその言葉に無言で頷く駿。達也が他の皆を促し去っていく。それを見送った駿は溜め息を吐いて、ちらりと雄大に視線を送った後。保健室へと駆け出していった――

第5話

……またここか

プカプカと、浮いているような感覚があった。辺りは真っ暗で、冷えきっている。うんざりしたように辺りを見渡すと、視線を向けたそばから映像が浮かび上がってくる。

それは、一つの物語だった。一人の少女が非日常に巻き込まれて、何時しか二つの世界を救って、親子で幸せに暮らしている。そこまでの物語だった。

足りない。自分の知識がそう叫ぶ。けど、ここにいる僕は叫ぶ口など存在せず。ただ魂だけが漂っているような、そんな感覚だけがあった。

――お久しぶりです

――ええ、お久しぶりです

聞こえてきた声。それは幼い少女のもので、ここ最近でよく聞くようになったものでもあった。でも、彼女は自分の知っている人物であっても別人。同一存在でしかないのである。

――調子はどうですか？

――いい…とは言えませんね

それは純然たる事実だった。自分の不思議な力は、使いすぎれば支配される。森崎雄大の皮を被った化け物になってしまう。それは自分の望むところではなかった。

――下手に使えば、身を滅ぼすと言いましたよね？

――ええ、勿論分かっています。

でもそうせざるを得なかった。夜天の書は、闇の書は所有者に対して等しく残酷だ。それは僕であっても例外じゃない。

――私はかつて救われました。けど、貴方は、貴方の世界では救われない。

――知っていますよ

――貴方を倒せる存在はいてもそんなのが私達にとって気休めでしかないことは分かってるでしょう？

――そこら辺は原典（オリジナル）もそうだったんでしょう？

――質問に質問で返さないでください。

――怖い怖い。…分かってますよそれは。でも僕はあの場所に居なくちゃいけない。それが森崎雄大としての使命ですから。

――…意志は固いようですね

――生憎と生来頑固な性質（たち）ですので

最後に見えたのは、困ったように微笑む少女の姿だった――

「…ん」

第一高校は保健室。そこのベッドで寝ていた少年が目を覚ました。彼に特に変わった面は見られない。強いて言うなら黒髪に若干白髪が入っていることぐらいだろうか。

少年の名前は、森崎雄大と言った。彼はここの高校の生徒であり、先程この部屋に収監された人物でもある。彼は体を起こすと、辺りを見渡した。

「目が覚めたか」

「駿…ありがとうございました」

雄大が駿に頭を下げると駿は「よせよ」と言って救急箱を取り出した。雄大は右手に一冊の本を出し、呟くように言った。

「……つくづく屑ですよねぇ、僕って」

「ネガティブだなあ、何時ものお前ならもっとへらへらしてるぞ?」

「駿が僕の事をどう思ってるか良く分かりましたよ…」

はあ、と溜め息をついて本を膝の上に置く。ベッドの上に胡座をかいていた彼はしばらく左右に体を揺らしていたが、ふとドアの方に視線を向けた。駿もつられてそちらを見ると、プシュ、と音をたててドアがスライドする。そこから入ってきたのは三人の人々だった。

「達也くん、レオ君に深雪さんにエリカさんと…壬生先輩？」
　入ってきた三人の内の一人である長身の男…司波達也は一人の少女を抱き抱え、所謂お姫様だっこ状態になっていた。雄大は胡座をかいたまま三人に手を振る。それにはエリカだけが彼に振り返した。その後、少女…もとい壬生沙耶香をもう一つのベッドに寝かせた達也は雄大を見やる。
「――話してもらうぞ」
「ええ、勿論…駿」
　雄大が駿に声をかけると、彼は雄大の手首と足首を手錠で拘束した。雄大は驚く四人に肩をすくめて、話し出す。
「ざっくり言うと、僕の心臓って心臓じゃないんですよね」
「…いきなりブッこんだな」
　驚愕の表情を隠せない三人を見て、駿は呆れ混じりの視線を雄大に向ける。雄大は手首と足首を拘束されているのに器用に体を使ってベッドのスレスレまで移動した。
「ち、ちょっと待て。つまるところ雄大の心臓は人工臓器とかってことか？」
「うーん…心臓のようなナニカと言った方が正しいかもしれませんねぇ、心筋、血液の循環と言った心臓の役割は一通り果たしているんですけど」
　レオンハルトが右手を前に出しながらそう言うが、雄大はそれを否定する。雄大が縛

られたまま指パッチンをすると、一冊の本が表れた。
「その本は？」
「僕は『夜天の書』と呼んでますけど…ざっくり言えば僕の心臓の副産物ですね」
「副産物って？」
「ああ！…じゃなくて。僕の心臓はこんなものなんです」
本が開き、空中にモニターを投影する。そこには、こう書かれていた。
「『永遠結晶エグザミア』…？」
「仮称、というか僕が勝手に名付けたんですけど。僕の心臓にある謎の結晶体は超高密度のサイオンで構成されています。そのせいでサイオン保有量が無限になっていたりするそうです…使いすぎるとデメリットがありますが、それをさっ引いても中々の効果でしょうね」
あっけらかんとした雄大だったが、その話は一介の学生に聞かせることのできるレベルをとっくに超えている。それを知ってか知らずか、雄大は一息ついて、また話し出した。
「僕はこの能力（ちから）のせいでこの高校に入れられたようなものなんです、壊したくないものが少しでも増えるならそれに越したことはない、エグザミアを少し動かすだけでここの高校程度なら消し炭に出来るでしょうから」

それを聞いて、司波達也は思い当たる節があった。それは軍属になってから数年後の話。

曰く、戦略級魔法師の中で一番デタラメなのはだれか、ということ。例えば、日本では五輪澪（いつわみお）という名を持つ女性がいる。彼女は幼い頃の雄大と同じく病弱で、しかし半径数キロもある水を陥没させる事のできる戦略級魔法『深淵（アビュス）』を扱える。他にもＵＳＮＡの戦略級魔法師アンジー・シリウスは辺り一体をプラズマで燃やし尽くす『ヘヴィ・メタル・バースト』を使うことができるし、公開されている戦略級魔法師『十三使徒』はどいつもこいつもぶっとんでいる。

…だが、公開されていない戦略級魔法師ならばどうか？『漆黒の聖誕祭（クリスマス）』という事件があった。それは、達也が十歳の頃の話。いきなり島が一つ吹き飛んだのである。何の前触れもなく吹き飛んだ島は誰も住み着かない無人島と言われていたはずなのに百人を越える人間が住んでおり、その何れもが無傷であり、救助された人々は一様に『や、闇が…闇が迫って…』と怯えた表情で呟いていたという。

日本政府はこの事件に対して『我が国の把握している戦略級魔法師』ではないと発言。それはそのまま『フリーの戦略級魔法師クラスの人材』が世界に放たれた事を意味していた。爆発の原因は今日まで不明。何も残っていないのだから調査のしようがない、と言った方が正しいかもしれないが。

それが、今目の前でほんわかとした表情を浮かべている人物…森崎雄大だとするならば。何が原因かわからなくとも、下手に刺激すれば島一つを吹き飛ばせるような存在ならば。今の第一高校は、特大の爆弾を抱えていることと同義なのだ。

「そ、そんなのって…」

「何とかできないのかよ!?」

「生憎と。とはいっても、今日のような事がなければ基本的に暴走はしませんし、そもそも僕が魔法を使いすぎなければいいんですけど…」

レオンハルトが声を荒げるがそう言って言葉を濁す雄大。それを聞いて、千葉エリカは悲痛な顔をしていた。魔法師の家系に生まれた以上、魔法と関わらずに生きていくことは不可能と言っていいだろう。いくら特大の爆弾を抱えていようとも、いくら本人が力を振るうことを忌避していようとも、世界はその程度じゃ待ってはくれない。かえるの子はかえる、という諺(ことわざ)の如く魔法師の子供は魔法関係の仕事にしか携われないのだ。

「そっか…すまねえな」

「大丈夫ですよレオ君。爆発しないとわかっていても、ダイナマイトを目の前に投げ入れられると驚くでしょう?それと同義です。」

暗に「気にするな」と告げた雄大だが、レオンハルトはもう一度頭を下げる。雄大が話を続けようとして――コンコン、とドアが叩かれた。

「…今日はここまでみたいですね」
「だな」
　そんなことを言いつつ駿がドアを開くと、そこには三人の人物がいた。一人は、この学校の生徒会長七草真由美。もう一人は、風紀委員委員長渡辺摩利。
　最後の一人は、まるで巌（いわお）のような男だった。この保健室の中で背の高い部類に入るであろう達也とレオンハルトが小さく感じる程の巨駆であり、彼は達也達、ひいては雄大をも見下ろしている。その姿は、どことなく圧迫感を与えるものだった。
「…まず、聞かせてくれ」
　男が口を開く。低く、聞くものに緊張を与えるような声。レオンハルトとエリカの顔に緊張が走った。そして、男は雄大へ指を差した。
「何故お前は手錠をかけられてるのだ？」
「何でも僕がマインドコントロールを受けているらしいですよ？僕は特に変わった所は無いように思うんですけど」
　ジャラ、と雄大の鎖が音をたてる。それは駿が先日話していたことを雄大が盗み聞きしたことだった。男に見られても駿の表情は変わらない。内心ではすぐ右側にいる不肖のクソ野郎（おとうと）を殴りたい衝動に駆られていたが、ボディーガードにはポーカーフェイスは不可欠である。…隣の雄大が駿から視線を背けたのはきっと気のせいだろう。

「まあまあ十文字君。パッと見大丈夫そうだし…大丈夫よね？」
「まあいざとなったら砕けばいいんで」
「……砕く？」
訝しげな表情をする七草の前で、雄大が手錠を粉砕する。手首をぷらぷらとさせながら、唖然とする皆を見て、駿に視線を向けて言った。
「あれ、駿。森崎の技の内一つですよねこれって」
「出来るのはお前だけだがな！」
やけくそ染みた駿の叫びに、達也は無言で哀れみの視線を送るのだった。

どうやら壬生先輩は入学してから直ぐの時、渡辺摩利（風紀委員委員長のこと。僕が気絶しているときに会っていたらしい）に手合わせを申し込んで敢えなく断られてしまったことを根に持っているらしい。二人の記憶の中にかなりの違いがあったようだけど、僕はどうにも違和感を感じていた。
「…まさか、一戦交えるつもりか？」
「その表現は適切ではありませんね、叩き潰しにいくんですよ」
達也くんが物騒な事を言ってるのを尻目に、そんなことを考える。エグザミアの性能を半分ぐらいバラしておいたのは案外間違いではなかったみたいだ。彼らには永遠結

晶エグザミアがただのバカみたいに危ない爆弾にしか見えてない。まあ僕が気付いたのは八割ぐらい転生知識のお陰なんだけど。そもそも、爆弾ごときだったならこの国の『十師族』とやらが既に動いている筈だ。…ザフィーラ達から聞いた話じゃ一回襲ってきて丁重にお帰りいただいたらしいが、信用は出来ない。彼らの元（ベース）が生きていた場所と今は、世界そのものがあまりにも異なっている。『死んでないからセーフ』を地でいくような彼ら…守護騎士ヴォルケンリッター＋α。味方で本当によかった…

「しかしお兄様。どうやってブランジュの本拠地を突き止めればいいのでしょうか？」

いつの間にか周りの空気がめっちゃ重くなってた件について。司波兄妹はいつも通りみたいだが、駿とか七草生徒会長とか達也くん達を信じられない物を見るような顔つきで見ていた。事情が全く理解できない。…取り合えず僕もやっておくとしよう。

「ああ…それなら、知ってる人に聞いた方が早い」

達也くんはそう言ってドアを開く。そこには、苦笑いをしているうちのクラスのカウンセラー、小野先生がいた。

「遥ちゃん？」

尚、レオ君の言ったようにあだ名は遥ちゃんである。誰が呼び出したかは分からないけどってこんなこと考えてる場合じゃなかった。達也くんに招き入れられた小野先生は地図を開き、指を差す。

「(何か行ったことあるようなないような)」
「何よコレ…学校の目と鼻の先じゃない‼」
「ナメやがって…!」
エリカさんとレオ君の口ぶりからすると、どうやら地図の場所はブランジュとやらの本拠地らしい。どことなく懐かしさを感じるのは気のせいな筈だ。
「車は俺がだそう。これは十師族というだけじゃない、ここの学校の一生徒として看過できん問題だからな」
トントン拍子で話が進んでいく。どうやら達也くん達はブランジュとやらを壊滅させにいくらしい。僕は…どうしようか。正直に言えばどうでもいいし壬生先輩が家裁送りになったとしても僕は何とかできる。彼らに着いていくことは手札を見せる事と変わらない。でも着いていかなかったら着いていかなかったで達也くんに疑いを与えることになる。着いていけばただのマッドサイエンティスト位には警戒レベルを落としてくれるだろうけど…
「(…どうするべきかなー)」
考え込んでいると、達也くんの目がこちらに向いた。
「雄大、お前はどうする?」
「——僕は、そうですね…」

森崎雄大は今、保健室のベッドに腰かけて、夜天の書をぱらぱらとめくっている。七草真由美も渡辺摩利も、森崎駿も今はいない。この騒動を鎮圧するために出ていったのだろう。結局、彼は達也達に着いていくことはなかった。

「――ねえ」

唐突に、小野遥がそう呟いた。雄大は本を捲る手を止め、彼女を見やる。

「どうしたんですか？」

「何故達也くん達に着いていかなかったの？」

「どうして、と言われましても…」

本を閉じ、しばらく思案していた雄大だったが、その思考は開いたドアによって遮られた。

「ぬ、ぬいぐるみ？」

それは、小さなウサギのぬいぐるみだった。赤い瞳に、首もとには青いリボンが着いているそれはふよふよ浮いて雄大の元にやって来たかと思うと、右手を上げる。

「成る程、学内のテロリスト達は全て制圧済。負傷者はいるものの何れもが軽傷。陣頭指揮には七草生徒会長が…あの人カリスマ力高すぎません？」

「ま、待って頂戴。そのぬいぐるみが何を言っているか分かるの？」

「ああ、紹介がまだでしたね。こいつは『セイクリッド・ハート』。遠隔操作可能なＣＡＤです」

ぬいぐるみが『こんにちは』と書かれた看板を掲げる。思わず遥と壬生沙耶香は「こ、こんにちは…」とひきつった顔で返してしまった。

『私の紹介はしないんですか？』

『貴方を紹介すると話がややこしくなりそうなので。またいつか、ということにしておいてくださいねヴィヴィオさん』

そんな会話を脳内で垂れ流しつつ、ぬいぐるみ改めセイクリッド・ハートは右手を上げる。雄大はベッドを降りて、歩き出した。

「ちょっと生徒会長に呼ばれたので行ってきます」

「……そう、気を付けて」

「ええ」

どこか考えるのを諦めたような顔をした小野遥と壬生沙耶香に見送られ、雄大は保健室のドアを開く。その顔は、いつもと変わらずのんびりとしたものだった。

「……」

その夜、司波達也は、パソコンの前で何かを考え込んでいた。テロリストの一件の後

始末ではない。それは十文字克人が引き受けてくれた。日本の裏において四葉（よつば）、七草に次ぐ権力を持つ十文字家ならば、日本の司法が自分達の手に伸びることもないだろう。

「どうされましたか、お兄様？」

自分の妹である司波深雪がコーヒーの入ったカップを置くのに礼を言いつつ、司波達也はキーボードを叩く。

彼の頭にあったのはかの少年こと森崎雄大だった。達也の記憶が正しければ、雄大は森崎に捕まったとき、保健室では当然のように持っていたあの本はなかった。森崎が取ってきたとは考えにくい。最後に『視た』とき、雄大はまだ目覚めていなかった。それにそもそも雄大は今日リュックを持ってきていない。とするならば、可能性として考えられるのは一つ。

「――物質転送魔法」

それは、不可能と言われた魔法。任意の物質を座標を指定することにより転送する、というもの。現代魔法は、エイドスを書き換えることによって今現在発生している事象を改変する。であるならば、物体が存在する位置の情報を書き換えれば物質の転送が可能になるのではないか、ということである。しかしいざやってみると不可能、物質は全くと言っていいほど反応せず、『物質はエイドスの存在する高位情報体次元を通ることは出来ない』という結論になった。ＢＳ魔法師ならその限りではないのかもしれない

が、少なくともそんな人物がいたという情報は達也にはなかった。

もし、仮に雄大が物質転送魔法の使い手だったとしよう。それならばこの国、ひいては十師族が放っておくはずもない。たった島一つを吹き飛ばした程度では、森崎雄大が放置されている理由としては弱い。本人が危険ならば、周り。例えば森崎駿のような親しい人を人質にとったり、世間から隔離した場所で洗脳紛いの教育を施す。十師族の権力ならばそれらは全て容易に達成できるだろう、と達也は考えていた。

それにあのデバイス。『バルディッシュ』は、現行の科学技術の範疇から何歩も先をいくようなデバイスだった。聞いた話では、雄大は他にも四つのリングが組み合わされたＣＡＤや遠隔操作可能なぬいぐるみ型ＣＡＤ等様々な『特異的デバイス』を操作していたらしい。

森崎雄大。ＢＳ魔法師の可能性が高く、異常な科学力を持つ魔法師らしくない魔法師。

「…お前は一体何者なんだろうな」

「？どうされましたお兄様？」

「いや、何でもないよ」

そう言って、達也は深雪に微笑んで見せる。何故か顔を赤らめた彼女に内心で首をかしげつつ、達也は彼女のＣＡＤ調整という己の責務を全うするのであった――

第6話

九校戦。それは日本全国にある魔法科大学附属高校が雌雄を決する戦い。政府関係者、海外からのスカウト、その他様々な魔法関係者がやって来る一年に一度の御祭り。

今、その幕が上がる。

「テストの結果がおかしいと思いまーす！」

第一高校、1―E組。その教室にいる一人の少年が声を荒げた。小学生にそのまま制服を着せたような彼の頭には、少し白髪が混じっている。

少年、名前を森崎雄大という彼は机に一枚の紙を叩きつける。それは彼の成績表だった。そこにはこう書かれている。

実技、最下位。理論、魔法工学及び魔法理論第二位。それ以外は最下位。

結論、総合成績最下位。

言ってしまえばこの少年。魔法工学、魔法理論を除いて常人以下の知能しか発揮できないのである。今回は特殊な事例だったためこんな成績だったが、次はどうなることだろうか。中学時代の彼の成績は推して知るべし。

「誰だよこんなふざけた成績とった奴はァ‼」
「お前だろ」
　ドアを開けて入ってきた彼のクラスメート、司波達也からの冷静な突っ込みに雄大はガクリ、と膝をつく。心なしか涙が溢れているような気がする。
「そういえば達也はどこ行ってたんだ？」
「ああ、実技試験について質問されていた」
　雄大をスルーしてレオは隣にいた司波達也にそう質問し、彼はそう言って席に座る。教室には彼ら三人の他にも千葉エリカ、柴田美月のような二科生、そして森崎駿に光井ほのかや北山雫といった一科生の面々がいた。彼らは一様に心配そうな表情を浮かべている。
　周りにも僅かばかり人がいたが雄大と駿の姿を認めると足早に去っていった。藪をつついて蛇を出す趣味は彼らにはないのである。なおそれを見た雄大がメンタルに多大なダメージを受けたのは最早言うまでもないだろう。
「あ、そうそう。達也くん理論一位おめでとうございます」
「…お前はもうちょっと自分の成績に危機感をもったらどうだ？」
「参加できてないので致し方なしってヤツですよ」
　そういえば、と言った風に呟かれた雄大の言葉に、達也はそう返して溜め息をつく。

と言うのもテスト初日。基礎魔法理論、魔法工学のテストが終わった直後、雄大がいきなりぶっ倒れ、そこから病院に搬送された後大事をとって一週間入院ということになったのである。追試をしようにもこのテストは九校戦の選抜にも関わってくるものだったため、一高教師陣は早めの決断を迫られていた。結果、雄大は基礎魔法理論、魔法工学以外のテストは成績に考慮されず、その代わり九校戦メンバーに選ばれることが無くなったのだった。

「で、実技試験の質問とは？」

「簡単なことさ。手加減だったんじゃないかって言われたんだ」

達也は肩を竦めながらそう言う。今回の試験、総合結果は以下の通りだった。

一位：司波深雪。

二位：光井ほのか。

三位：北山雫。

二位と三位は僅差とはいえここまでA組の名前が続き、四位でようやく十三束（とみつか）という名前のB組の男子生徒が出てくる。因みに駿は九位だった。本当ならばもっと上位に食い込めるはずだったのだが、彼の場合理論が足を引っ張った形になる。

実技は余り変わりが見られない。強いて言うならば駿が三位に浮上しているぐらいだろうか。しかし理論のみの成績となると、この順位は大きな変わりを見せる。

一位：司波達也。
二位：司波深雪。
三位：吉田幹比古（よしだみきひこ）。
四位はほのか、十位が雫、十七位に美月、二十位がエリカ。レオと駿はランク外。
確かに一科生と二科生との区分けの際、実技が多く比重を占めていることは否めない。だが、上位には多くの二科生がおり、その中でも達也は合計点ではない、平均点で二位の深雪と十点以上の差をつけていたのである。
「まあ達也くんの点数は一科生、それも新入生総代であった深雪さんよりもかなり高い水準でしたからね…というか僕が一番自信のあった魔法工学と基礎魔法理論でも一位でしょう?だったら疑うのもおかしくはありませんねぇ。」
「それだけお兄さんの成績が衝撃的だったんでしょう」
何故か胸を張るほのかに対し謙遜しようとして、さりとてそれも嫌みになると思ったのだろう、苦笑いを達也は浮かべた。
「それで、誤解は解けたのか?」
「まあ一応は。と言っても、転校を薦められたがね」
駿から投げられた質問に達也が応答し、その返答に雄大と駿以外の皆が首を傾げた。
雄大はあごに手を当てていたと思うと、

「転校…というと四高ですか」
「まあな。その方が魔法工学とかは進んでるだろうし、そっちに転校した方がいいんじゃないかと言われたんだ」
「え?!お兄さん転校されるんですか!?」といったほのかの驚きの声に、達也はもう一度苦笑いを浮かべ、
「勿論、丁重にお断りさせてもらったがな」
その返答に、ホッとした顔をする美月とほのか。エリカとレオは憮然とした顔をしていた。なお、残りの三人は心が読めないポーカーフェイスを維持していたが。
「何よそれ…あり得ない!」
「全くだぜ、授業についていけなくて成績が悪いならまだしも成績がいいから転校を薦められるなんて…!」
二人の言葉に達也は再び苦笑を浮かべる。そもそもテストでわざと悪い点数を取ることになんの意味があるというのだろうか。雄大のようにテストに途中から一切参加していないような生徒ならまだしも、実技試験は間違いなく達也の全力であったと言えるだろう。
「…司波達也の魔法関連の知識レベルは日本の高校生どころか、大人の基準すらも軽く越えている」

「なら達也くんが一部の教師に疎まれるのも仕方がありませんね」
恐らく一高教師陣より魔法を知ってるでしょうし、と続けたのは雄大と駿の二人だった。彼ら二人は一応ボディーガードの家系に産まれている（雄大は違うが）ので他人の思考を読むよう訓練されている。教師陣の心境を図るのも、二人にとっては造作もないことだった。
重い空気が彼らを包む。何とか話の流れを変えようとして、達也は口を開いた。
「所で雄大、そのパソコンはどうしたんだ？」
「これですか？これはですね…っと」
そんなことを言いながら雄大がパソコンを立ち上げ、パスワードを打ち込む。そこにはひとつのファイルがあった。
「これって…」
「駿のＣＡＤですよ」
そこに書いてあったのは、銃の形をしたＣＡＤだった。雄大は達也の前にそれを持っていき、机に置く。
「ちょっとこれを見て意見をいただきたいな、と。達也くんって多分深雪さんの調整もやってますよね？」
「……どうしてそう思うんだ？」

「何となーく、です。深雪さんの性格上達也くんの事はかなり信頼なさってるようですし、ＣＡＤの調整位なら任せても可笑しくないかなと」
「…そう言うことにしておくか。どれどれ…」
　達也がパソコンのモニターを見る。ＣＡＤの設計、魔法式の構造。しばらく感心するような仕草を見せた彼だったが、ある一点で視線を止めた。
「雄大、ここの魔法式なんだが改造を加えてるな？」
「…やっぱ不味いですかね？駿が魔法式を展開しやすいようにむりくり弄ったんですけど」
「いや、別におかしくはない。ただ魔法式のこの部分は初期化（テンプレート）しておくべきなんじゃないか？」
「そこなんですけどね、実は魔法師が個人個人で発しているサイオン波が――」
「なるほど。それなら――」
　静かではあった。しかし、達也と雄大が話している内容は既に一高校生のレベルを遥かに上回っている。従って付いていけないレオやエリカ、駿達の話の内容は別の方向へと進む。
「そういえば森崎くん」
「どうした？」

その口火を切ったのはほのかだった。彼女は駿の方を向き、口を開く。駿は口に飴を放り込もうとしていた手を止め、ほのかを見た。
「九校戦の準備は大丈夫なんですか？深雪さんは結構大変そうだったんですけど…」
「ああ、俺は大丈夫さ。今日はまだ作戦を決める段階ではないしな、それに司波さんは生徒会としての仕事もあるだろうし、俺より忙しいのは当たり前さ」
「因みに何に出るんだ？」
「モノリス・コードとスピード・シューティング。とはいっても優勝は大分厳しそうだが」
モノリス・コードと聞いた所で、どことなく北山雫の目が輝いた気がする。それに駿は内心で首を傾げつつ「何でだ？」と質問するレオの声を聞いた。
「…今年は三高からあの一条の御曹司が出てる」
「――へえ」
その質問に答えたのは北山雫だった。レオンハルトの感心したような声と共に彼女はすらすらと、いつもの表情の読みづらい顔のまま語っていく。
「深雪は女子だから一条の御曹司、つまり男子とは戦わない。けど、男子は一番高いポイントをもつモノリス・コードで、確実に一条を倒さなきゃいけないから…」
「優勝は難しい、と。」

「――やけに詳しいんだな」
「零はモノリス・コードのフリークで、毎年九校戦を見に行ってるんです。ね、零？」
「…うん。」
そう頷く零は、いつも通りの無表情…とはいかず、若干の照れが滲んでいた。駿は感心したような目を向けつつ、口に入れた飴を噛み砕くのだった――

「…」
ボケッとしながら、少年は道を歩いていた。周囲には、彼を除いて誰もいない。人の気配すらなかった。ただ、空っぽであろう住宅とキチンと舗装された道路があるのみである。
「――ご報告を」
いつの間にか少年の隣には、一人の女性がいた。腰まで届く銀髪に袖無しのコート、右手には蛇のようなものが絡み付いている。少年は彼女に目を向けることもなく、いつもより数段低い声で応えた。
「よろしくお願いします」
「今日未明、主が学校に登校された後襲撃を受けました」
「所属組織は？」

「『七草』、もしくは『例の組織』かと。」
「七草、って生徒会長の所ですよね？」
訝しげな表情をする少年に、女性は付かず離れず、絶妙な距離感を維持しつつ首肯した。
「ですが、今回の一件に彼の家が絡んでいる事はないでしょう。仮にも、我らは『四葉』を退けたのです、まともな家ならば敵対しようなどとは思いますまい」
「…下手人は？」
「既に捕縛済みでございます」
「では、命令を」
少年…■■■■は右手に一冊の本を取りだし、それを開きつつ命ずる。
「夜天の主として守護騎士に命ずる、『誰一人として殺すな』」
「――管制人格、リインフォースⅠ、オーダーを承諾」
敬々しく頭を下げる女性…リインフォース・アインス。少年が瞬きした後には、彼女の姿は既に跡形もなく消え失せていた。
「――――ハァ…」
少年は短く溜め息を吐き、人の気配が戻った夜の住宅街を歩く。頭をかき、満天の星空が照らす夜空を仰ぎ見るのだった――

「ガ、ギイ!?」
　同業者の悲鳴が辺りに木霊する。どうしてこうなった、と奥歯が割れそうなほど強く噛み締める。
　そこにあった筈の毒のカプセルは既に噛み砕かれている。本来ならば、自分という人間は全身を苛(さいな)む激痛にのたうち回り死んでいるはずだった。
「うるせぇな、ちょっと黙ってろ‼」
　赤毛を三編みにした少女が、その背丈に見合わぬ程大きな槌で鉄球を放つ。同業者へその凶弾が当たることはない。少し後ろで派手な音をたてて爆発するだけだ。
「ヴィータちゃんあまりやり過ぎないの‼」
「分かってる、でもあたしはこいつらが納得いかねえ」
　くるくると、まるでバトンでももつかのような気軽さで巨大な槌を振り回すヴィータという名前の少女。彼女の鋭い目と大きな槌は、こちらに向けられていた。
「あたし達はこの国を害する気はない。散々あの女にも説明した！主がいないのならばいざ知らず、あたし達は主に創られたんだ！だったら――
「今帰ったぞ」
　来た。自分達を撃破した規格外(バケモノ)が。

『――闇に、沈め』

一瞬だった。今考えてみても、どうやって自分達が撃破されたのか皆目検討もつかない。気が付けば倒れていた。それ以外に表現のしようがなかった。バケモノは物理法則を完全に無視した動きで浮遊しつつ、ゆっくりとヴィータの隣に立った。

「どうだったアインス？」

『誰一人として殺すな』だそうだ…相も変わらず甘い」

「だがそれでいい。我らが主は手を汚すべきではない」

アインスと言うらしいバケモノの声に、私達をよくわからない鎖のようなもので拘束している男が、そう言って足で地面を叩く。

「締め上げろ…『鋼の軛』」

地面がまるで杭のように流動したかと思うと、私たちをまるで磔にするかのように拘束し直した。

「さあ…キリキリ吐いてもらうぜ！」

「（ヴィータのあの張り切りようはなんなんだ？）」

「（…そういえばあの子実体化してから戦うのって始めてだったかしら）」

――――――――――――――――――――

「ただいま！…あれ？」

家のドアを開けると、そこには五人の人物がいた。こちらに軽く頭を下げるシグナム、本を読んでいた顔をこちらに向け、すぐに本へ戻すなのは、フェイト（ヴィ）とキャットファイト中のユーリ、それを苦笑いしながら見ているはやて（ディアーチェ）。

まだ一週間も経っていないのに彼女たちに体があることにもう慣れつつある自分に苦笑しつつ、靴を脱いで廊下を歩く。

『だったら実体化でもしてくださいよ!!』

事の始まりは、テロリストの一件からだった。基本的には夜天の書に搭載されているヴォルケンリッター（シュテル）以下守護騎士達は夜天の書に書いてあるものではなく、僕が創ったデバイス達に搭載されているサポートシステム『マルチタスク』を使う際にデバイス達に最も適合する形の人格を与えただけのものでしかないんだけど…まあ何というか、すごく過保護なのだ。で、テロリストの一件以降、全員が学校についてこようとするもんだから、常時実体化でもして家を守ってくれとやけくそ気味に叫んだのだ。

デバイス達は実体化出来ないわけではない。僕の持つリンカーコアの性質上、僕が命じれば実体化は可能ではある。しかし、彼女たち自身が自らの意思で実体化したことは今までなかった。だからこそそう言ったのだが…

――何とこの騎士達、たった二日で完全な実体化を修得したのである。

レイジングハートのような二つ人格があるデバイスは何というか虹彩異常症（オッドアイ）みたい

になってる。人格を足して二で割ったような感じだ。でまあ、実体化したからこそやはりというべきか、過保護が加速した。学校には夜天の書を持っていくということでなんとか妥協してもらったが、それ以外、家だとか買い物だとか、そう言ったものに着いてくるようになったのである。お陰で拒絶しようとしても周りの人達から微笑ましいものを見る目で見られている。きっと『反抗期に成り立てでつい反抗しちゃう素直じゃない子供』みたいにみられてるんだろうなぁ…こんなときほど、自分の身長の小ささを恨んだことはない。もうちょっと身長高めに生んでくれれば良かったのに…

「まだアインス達は帰ってきてはないみたいですね」

「あ、さっき帰ってくるって連絡があったですよ?」

そんな事を言いつつ歩いていると、体長三十センチにも満たない小さな騎士、リインフォースⅡ(ツヴァイ)がふよふよと浮きながらそう告げてくる。

僕はリュックを降ろしデバイスを調整するときに使用する机の近くに投げた。パソコンが入ってはいるがこの程度で壊れはしないだろう、頑丈だし。

「…どうしたんですかシュテル」

その一連の動作を、じっとシュテルが見つめていた。何が何だか分からないけど無表情で見つめられると心にくるものがあるんだけど…シュテルはすっ、と右手を僕の、正確には僕の頭の辺りまで持っていった。

「いえ、何となくですが、白髪の割合が増えてませんか?」
「そうなんですか?さっき鏡を見たときは特に変わってないように思うんですけど…」
　そう言いながら本棚からファイルをたくさん机の上に放り投げ、リュックから取り出したパソコンを起動する。
「――コーヒーです、どうぞ」
「どうも」
　コトリ、と音をたてて机の上にコーヒーが置かれた。さっきから静かだと思ったらそんなことしてたんですねシグナムさん。…美味い。眠気を吹き飛ばすには丁度いいな。
「只今戻りました」
　玄関から、そんな声が聞こえてくる。椅子ごと体を回転させると、アインス達がそこにいた。
「おかえりなさい」
「只今戻りました」
「ただいまー」
「ただいま」
　微笑みながらそう言うと、アインス達は口々にそう言って大して広くもない家へ入ってくる。

もう一度コーヒーを飲み、溜め息をつく。
「どうされましたか主」
「いえ…最近騒がしくなったな、と」
そう言うと、シグナムは笑みを浮かべて、
「ですが、たまにはこういった騒がしさも悪くは無いでしょう?」
そんなことを言ってきた。…全く。もう一度ため息を吐きつつ、口を開く。
「悪くはないですよ、ええ」
そう言うとシグナムはもう一度微笑んだ。…本当、デバイス達に人格を引っ付けたのは失敗だったかもしれないなぁとか、いつまでユーリ達はキャットファイトをしているつもりなのかとか、シグナム含め騎士達はどうしてそれに突っ込まないのかとか。色々言いたいことをコーヒーを三度飲む事によって喉の奥に流し込む。
――ドクリ、と。あるはずのない心臓がなる音がした。

第7話

――どうしよう。

もしも今の雄大の心象を一言で答えよ、という問いがあったならば、その五文字こそが最も適当であると言えるだろう。

さて、雄大は現在第一高校の演習棟、その中の演習室の近くにいた。

ボケッとしていたのがいけなかったのかもしれない。通い始めて半年も経ってはいないとは言え学校で迷うなどいい笑い者だ。

「困りましたね…」

守護騎士はいつかのテロ騒ぎのせいか過保護になっている。流石に学校まで干渉をしてくることはないが時間の問題であった。そんな時に彼らを呼び出せばどうなるか…想像に難くない。

闇の書を開く、というのも手段の一つではあるのだが、そんな事をしたら守護騎士達が殺意マシマシで突っ込んでくるのが目に見えている。

「本当にどうしましょう…」

そんな風に呟きつつ、廊下を歩く。マップを出そうにも、デバイスから逆探知されそ

うだから紙のものしか使えないし、勿論のことそんなものを都合よく持っているわけがない。要するに手詰まりであった。

「――あれ？」

彼女を見つけたのは、そんなときだった。彼女は演習室の中から光が漏れ出ているのに目を奪われているようだった。その彼女、柴田美月に声をかけようと近づいて――一瞬、足を止める。

「誰だ！」

鋭い誰何（すいか）の声が響いたのは、そのすぐ後のことだった。

「きゃっ！」

突風か何かに吹かれたように、柴田美月が倒れる。雄大は弾かれたように走りだし、演習室の中へ入っていく。

「――落ち着け幹比古。今ここでお前とやりあうつもりはない」

そこにいたのは、柴田美月を抱き止める司波達也と、彼を憎悪のこもった目付きで睨む吉田幹比古だった。

「――一体全体どうなってるんですか？」

思わず、小さく漏れた彼の呟きに吉田幹比古が反応し、雄大へ目線を向けた。

「…森崎？」

「ええ、森崎雄大ですよ…それで？一体どうしてこんな状況になったんです？」
そんな事を言いつつ雄大が演習室に足を踏み入れると、吉田幹比古が一回、目を閉じて。
「――すまない達也。そんなつもりじゃなかったんだ」
そう、頭を下げた。
「気にするな。元はと言えば術者の集中を乱した美月が悪いからな」
「私ですか!?」
「いや、柴田さんは悪くないよ。気配を感じたぐらいで切れるような集中力なら、術者としてはまだまだ未熟だ」
そんな風に話す彼らの横で雄大はぐるりと部屋を見回し、呟いた。
「魔法の練習ですか？」
「そんなところだ」
へぇ、と意味ありげに頷いて。雄大は服の内ポケットから小さな本を取り出した。
「相変わらず変わったＣＡＤだな」
「自分の一番使いやすい形を追求した結果ですよ」
そう言いつつ、雄大は部屋の隅へ歩いていく。それを見て苦笑する吉田幹比古に、司波達也が話しかけた。

「知り合いなのか？」
「知り合いというか…面識がある程度かな」
幹比古曰く、数年前の話だ。まだカートリッジシステムが普及していなかった頃。『森崎家にはすさまじい技術力を持ったエンジニアがいる』という噂が流れた。その時期に森崎雄大という少年が森崎家に養子として入ることになったというものも。
「もっとも、雄大と初めて会ったのは家の私塾だったけどね」
そんな事を言って、彼はまた苦笑した。
「――」
「どうした美月？」
そこで司波達也は、柴田美月が呆然とした表情で雄大を見ている事に気づく。
「い、いえ…雄大君の回りに沢山の色の光があるみたいで…」
そんな彼女の様子に、司波達也は思わず雄大の方を見る。しかしそこにいたのは手元の本のようなもののページをめくって灰を巻き上げ、一ヶ所に集めている彼の姿だった。
「…色？」
ぽつり。驚きで限界まで目を見開いた吉田幹比古がそう、小さく呟いた。

「幹比古?」
「ひょっとして柴田さん。君は——　「吉田くーん」
　吉田幹比古が何かを柴田美月へ話しかけようとしたのを、雄大の声が遮る。
　そこにいた彼は香木をくべていたであろう卓上の炉を指差していた。
「これ、片付けちゃって良いですかー?」
「俺も手伝うよ、少し待っててくれー——ごめん二人とも、また後で」
　そう二人に断って、吉田幹比古は雄大の元へ行こうとするが、司波達也と柴田美月はその後を追った。
「俺も手伝おう」
「わ、私もお手伝いします!……元々私が原因ですし」
「さっきも言ったけど、柴田さんは別に悪くはないよ」
　そんな事を話ながら、雄大の元へ歩いていく。どうやら、先程幹比古が何を聞こうとしていたのかについては後回しにせざるを得ないらしい。そんな事を思いながら、司波達也は歩いていく。
　——西城レオンハルトと千葉エリカとの待ち合わせがあるのを、いつ言い出そうかと思いながら。

八月一日。それは九校戦へ向けて出発する当日であった。

基本的に一高は遅めの現地入りをする事が多い。というのも現地の近くにある練習場は基本的に遠い学校から割当てされるため、一高の早くに現地入りする事に対するメリットが薄いのだ。

そんなわけで、司波達也以下九校戦へ参加するメンバーはバスに揺られ…ということはまるでなく、むしろ自己主張の激しい太陽の下に立ち尽くしていた。

「司波」

「何だ」

「水、いるか？」

「…助かる」

隣で背筋をピンと立てて立っている森崎駿から受け取ったボトルに口をつけつつ、司波達也は空を仰ぐ。

「ごめーん、お待たせー！」

そんな事をしていると、そんな声共に一人の少女が駆けてくる。七草真由美。一高の生徒会長である彼女の到着をもって、九校戦メンバーが全員集結したのだった。

「七草会長、おはようございます」

「おはよう森崎君。——弟さんは元気かしら？」

「?まあ元気ではありますが…」
首を傾げる森崎駿に代わって、渡辺摩利が話しかける。
「遅いぞ真由美」
「ごめんごめん」
そんな短いやり取りと共に、彼女と渡辺摩利はバスの中へと入っていく。と思うとちょっとしてから彼女だけが戻ってきた。
「――何か忘れ物でも?」
ポーカーフェイスを保ちつつ、司波達也はそう問い掛けた。化粧品等の諸々は前日の内に発送を済ませており、全員分あるのは彼も確認済みだった。
尚、化粧品周りの知識は妹である司波深雪から仕入れたのは言うまでもない。
「ううん。違うわ。…ごめんなさい達也くん、私のせいで随分待たせちゃったみたいで…森崎くんも」
「事情は聞いていますし大丈夫ですよ」
「自分は職業柄、最後にバスに乗らないと落ち着かないので…」
連絡があったのは、今から三時間前の事だった。彼女、七草真由美は日本の十師族のうち『七草(さえぐさ)』の名字を冠してはいるが、彼女は七草家の明確な跡取りというわけではない。

彼女には兄が二人いる。順番で数えれば三番目――ましてや一介の高校生の身である彼女が駆り出されるということは、よほどの用事であるらしかった。
「それでも、よ。暑かったでしょう？」
「こまめに水分をとってましたし、そう暑いとも感じませんでしたよ」
彼女が連絡してきた際に現地で合流すると言っていたのだが、三年生全員の意見が待つという事で一致したので彼女も急いでやって来たというわけだ。…もっとも、達也は内心反対だったが。
「そう？でも汗とか結構かかなかった？こんなに暑かったのに」
「発散系統の魔法なら多少は明るいので…夏場に汗をかかないほど、変態でもないつもりですが」
そんな司波達也の言葉に、駿が吹き出しそうになるのをこらえた。
「変態って…」
そして、七草真由美がそんな言葉と共に苦笑する。しかし直ぐに悪戯っぽい笑みに変わったかと思うと、白いサマードレスの裾をつかんで気取ったポーズをとった。
「それよりどう？これ」
これ、というとその白いサマードレスのことだろうか。そう司波達也は思考する。
「…ん？」

それを見ていた森崎駿の元に、電話が一つかかってきた。どこぞの病弱（笑）なショタに持たされた前時代的なケータイのディスプレイには、『森崎雄大』の名前が記されている。
「もしもし雄大か？」
『もしもし？駿ですか？』
「ああそうだが、どうした？」
電話口から聞こえてきた耳慣れた声に、若干の安堵を覚えつつ森崎駿は雄大へと話す。
『今車の中ですか？』
「いやまだだ。今から出発だが、それがどうかしたのか？」
司波達也に『少し待っていてくれ』の意味を込めてアイコンタクトを送り、雄大にそう返す。
『いえ何も。…気をつけて下さいね、何があるかわかりませんから』
「？あ、ああ…」
『では来客があるのでこれで』
頑張って下さいねー、という気の抜けた声と共に電話が切られる。
「なんだったんだ…？」

そう呟きつつも、駿はバスの方へと歩いていくのだった――

「……」

「森崎？どうかしたのか？」

「桐原先輩？…いえ、なんでもありません」

前方では、丁度生徒会メンバーのほぼ全員が服部副会長（本名は服部刑部少丞半蔵というのだが、長いのと本人が本名を嫌っているようなので駿はこう呼んでいる）をからかっている。後ろでは若干不機嫌な司波深雪が空気を文字通り凍らせていた。

そんなカオスな空間の中、近くの席に座ってた先輩である桐原武明（きりはらたけあき）が駿へと話しかけた。

「何か考え事でもしてるみたいだったがどうした？」

「いえ…珍しいことがあったので」

「珍しいこと？」

そう言う桐原武明の顔は、どことなく好奇心が見え隠れしていた。

どうやら相当考え込んでいたらしい、と森崎駿は自省する。そして一つ、咳払いをした後に話始めた。

「実は今日、珍しく弟の方から連絡がありまして」

「弟っつーと…雄大って名前だったっけか？」
「はい」
　頷いて、顎に手を当てる。
「アイツ、普段は自分の方から連絡してくることなんて滅多にないんですよ」
「そうなのか？」
「なんでも『駿ならそう易々とは死なないでしょう』ってことらしいんですけど」
「…弟なんだよな？」
「義理で双子の、ですけどね」
　弟とは？と桐原武明の脳内で哲学的な問いを繰り広げられる。
　そして数分後、そんな思考は放棄されたのだった。
「…まあいいや。それで？」
「アイツが連絡してきたってことは何かしら起こるんじゃないかと思いまして」
「中々酷いことを言うな!?」
「それくらい珍しいっていうのもありますけど「危ない！」…ん？」
「あん？」
　外へと目を向けた駿が見つけたのは、対向車線のオフロード車が傾いて、車輪の部分から火花を散らしている光景だった。

「事故みたいですね」
「だな…」
車内のあちらこちらから興奮するような声がしている。高速道路の両車線の間には強固な壁が張られており、この車内に炎や衝撃が来ることはない。
若い少年少女にとっては、ただの見世物程度の感覚なのだろう。
少なくとも、その時までは。
ひっ、と誰かの悲鳴が聞こえた。
何の偶然か、対向車線のオフロード車がスピンしながら壁をかけ上がり、あろうことかバスの進行方向へと落ちてきたのだった。
急ブレーキがかかる。
苦悶の声は、シートベルトをしていなかった生徒のものだろうか。
しかしそんな事を考えている間にも、車は刻一刻とこちらに近づいている。
「っ…」
反射的にＣＡＤを抜き放ち、迫ってくる車へ向けて発動しようとする。
「吹っ飛べ！」
「止まって！」
「ッ!?」

しかしその行為は、あとコンマ数秒のところで中断せざるを得なくなってしまった。魔法を発動する、ということを判断できたのは普段ならば称賛されるべき事なのだろう。しかしこの状況において、下手に魔法を発動できなくなった事を考えると邪魔でしかなかった。

「待て、撃つな！」

「くっ…」

苦虫を噛み潰したような表情で、駿はシートベルトを外して立ち上がった後、太ももへ手を伸ばす。彼が取り出したのは、リボルバー式拳銃の形をしたＣＡＤのようなものだった。

「カートリッジ、ロード…」

駿の足元に頂点に円を持つ正三角形のような魔法陣が展開される。

「私が炎を！」

車内の視線は二分されており、一方は迫り来る車へ、もう一方は立ち上がったたおやかな一年生へ向けられている。

誰かが気づいてもいいはずなのに、誰も駿の方へと目を向けない。向けようともしない。

ガシャン、ガシャン。二つの薬莢のような金属の塊が床に落ちる。刹那、駿は迫って

くる車へ銃口を向け、引き金をひく――

しかし、その魔法は発動されることはなかった。

「(何っ!?)」

展開されていた魔法式が全て消滅したからだ。勿論、それは駿の展開していた魔法陣も例外ではない。

そして、それを待っていたかのように司波深雪の魔法が行使される。

見事な魔法だった。

炎上した車を凍らせる訳でもなく、ドライバーを窒息させることもなく。常温に冷却することで瞬時に消火を成功させた。

十文字克人が展開した防壁に激突した車が潰れる音がする。

こうして、ちょっとしたトラブルは終結したのだった。

「…くそっ」

車内が生き残ったことに対する安堵に包まれるなかで、駿が小さく舌打ちをする。その表情はまるで苦虫を噛み潰したようであり、またどことなく悔しげだった。

「みんな、大丈夫?」

そのタイミングで、七草真由美がそう声をあげる。

「司波さんと十文字くんの活躍で、今回は大惨事にはならなかったわ…シートベルトを

してなかった人は、次回に役立てましょうね？」
　もっとも、次回なんて来ない方がいいけれど。そう冗談混じりに締めくくった彼女に、車内から若干の笑い声が響く。
「……」
　それでも尚、駿は難しい顔をして考え込んでいたのだった…

　一方、東京某所。
「……」
　その場所には、一人の少年と、何人かの男女が立っていた。男女たちの位置は丁度、少年を囲うようである。中心にいた少年は開いていた本を閉じると、顔をあげた。
「…遅いですねぇなのはさん。何かあったんでしょうか？」
　その声は、誰かを案じているようだった。
　白髪がメッシュのように入った黒髪をいじり回し始めた少年の言葉に、彼の隣にいた女性が耳打ちする。
「彼女に限ってそのような事はないかと…仮にも本物のコピーですから」
「まあそうなんですけどね？やっぱりどこか心配じゃありませんか？」
　そのシュテル、もしくはなのはという人物が心配なのかしきりにその辺りをうろうろ

とする少年だったが、そこに一人の少女が文字通り降りてくる。
「遅れてごめんなさーい！」
「ああなのはさんお帰りなさい…シュテルもお帰り。どうでした？」
『ただいま戻りました…付近１００メートルに人影、魔法的な細工、どちらもありませんでした』
その少女…正確には彼女の持っている杖の声に少年は満足そうに頷き、男女たちの中心に一枚のウインドウを投影した。
「さて、今回の議題は――アインス」
「了解しました」
少年の右隣。白銀の髪に、深紅の瞳、長い丈の黒いノースリーブコート。人形のように整った顔立ちをした女性が、すっくと立ち上がった。
「さて、皆。無頭竜（ノーヘッドドラゴン）という組織について説明していこう」
アインスと呼ばれた女性がウインドウに触れると、十数枚程度の画像が現れた。
「この組織は香港系の国際犯罪シンジゲートで、此度の九校戦において『親』の役割を担っている」
「親？」
「賭けの胴元、ということだ」

アインスのその言葉に質問した人物…帽子を被った赤毛の三つ編み少女が納得したように頷く。
「といっても今回の一件はこの中の一部…東日本支部に限った話だが」
「えーっと…その組織がどうかしたんですか？」
おずおず、といった風に手を上げたのは金髪のゆるふわ系といった風貌をした少女だ。
「何、簡単なことさ」
それを受け、アインスは不敵に笑う。そしてウインドウを消し、自らの右手に一冊の本を呼び出した。
「今からこの組織を壊滅させる」
「…それは、その組織の構成員を殺す、ということですか？」
金髪の少女の周りに、一瞬にして機械的な翼が出現する。
アインスは何も言わない。ただ本を開き、そこに立っているだけだ。
一触即発。剣呑な雰囲気が辺りを包み、そして――
「落ち着いて下さいユーリ」
少年が、口を開いた。
彼は立ち上がると、アインスとユーリと呼ばれたゆるふわ少女の間へと入る。

「アインスも、意地が悪いですよ…必要な情報はなるべく早めに伝えるように」
「分かりました…ユーリ、お前の心配しているようなことはない。ただ支部を機能不全にするだけだ、誰も殺すことはない」
「要するに彼らのいるビルを解体するんですよ、流石に住宅街、それも九校戦の会場近くでそんなことがあったとあっては彼らも調べざるを得ないでしょうから」
　女性の言葉に、少年が補足を入れる。ほっ、と安心したような溜め息を一つ吐いてユーリは翼を消した。
「他に質問はありますか？」
「解体する、っちゅーてもどうやって？まさか爆弾でも使うん？」
「それこそまさか、ですよ…まあビルは跡形も無くなるでしょうけど」
「うっわー、悪い顔しとるー」
　茶髪の少女が、口元をひくつかせながらじとっとした目で少年を見つめる。
「で、結局のところどうするの？」
　金髪少女…こっちはゆるふわではなくストレートのツインテールだ…の問いかけに、少年は持っていた杖を軽く振り下ろした。
「最大火力でドカーン」
「シンプルでいいね、分かりやすい」

「え？」
「え？」
そんな返答は想定外だったのか少年が金髪少女の方を驚いた顔で見る。
そんな会話をした後、少年が一つ咳払いをした。
「……まあいいでしょう。じゃあ、行きましょうか」
少年がそう呟いた瞬間、部屋から少年以外の人の気配が消えた。
誰もいない部屋の中、少年は天井を見ながらぽつりと呟く。
「僕は…今、君との約束を守れているでしょうか？ねえ――
――森崎雄大君」
かくして。日本の若き魔法師たちがそのプライドをぶつけ合う、その裏側で。夜を統べる者達が動き始める。